

古代ギリシアにおける知識人の経済生活

藤 縄 謙 三

目 次

序 文	
第一章	初期の自然哲学者たち
第二章	歴史家の場合
第三章	ソフィストたち
第四章	ソクラテス
第五章	小ソクラテス派
第六章	弁論術教師の場合
第七章	プラトンとアカデメイア学園
第八章	アリストテレスとリュケイオン学園
第九章	特異な生活の諸学派
結 語	

序 文

紀元前1世紀中頃の歴史家 Diodoros は、バビロニアのカルデア人 (Chaldaioi) の学問の在り方を、ギリシアの場合と比較し、前者の方を高く評価している。

これら万事についての学習の方法は、この種のことに従事するギリシア人の場合とは異なっている。カルデア人の間では、それらについての学問 (*φιλοσοφία*) は家系によって相続されており、子が父から継承するのである。しかも、それ以外の面での国家への奉仕は、すべて免除されている。それゆえ父親を教師として、すべてを惜しみなく学習するとともに、教えられたことに対しては、はるかに確乎たる信頼の念をもって注意を向ける。そのうえ幼少の頃から学習しながら育てられるので、若さゆえの学び易さや、それに捧げる年月の長さのおかげで、非常な能力を身につけるのである。

ところが、ギリシア人の場合には、準備もなしに多くのことに向ってゆくのだし、また年齢が進んでから哲学に着手する。そして、ある程度まで努力した上で、生活上の必要に妨げられて放棄してしまう。ただ少数の人々だけが哲学のために着物を脱いで、金儲け仕事として、その学習を続ける。そして、いつも最も重大な教説について新しい説を出そうとするのであって、先人の道を歩もうとはしない。その結果、これら異国人の方は同一のことに常に固執している

ため、細部の点まで確実に把握しているのに、ギリシア人の方は、金儲け仕事での利益を目指しているので、新奇な学派を創設し、そして最も重大な理論について相互に異説を対立させて、弟子たちの考えを分裂させ、彼らの魂を迷わせてしまう。彼らの魂は生涯を通じて動揺し、何事をも確かには信じられなくなっている。もしも誰かが最も有名な哲学の学派を精密に検討して見るならば、それらは相互に極端なまでに異なっており、最も重大な教説について反対の説が唱えられているのを見出すであろう。(Diod. II, 29, 3~6)

Diodoros のカルデア人についての記述の部分は、Eduard Schwartz によれば、ストア派の博学者 Poseidonios (ca 135~ca 50 B.C.) に依拠しているものと推定される¹⁾。いずれにしても、ここに引用した比較論は、主として Hellenismus の時代の状況を念頭において考え出されたものであろう。しかし、ここに指摘されたギリシアの学問や学者の特徴の全部または若干は、もちろん古典期ギリシアについても妥当することであろう。私たちが普通、ギリシアにおける学問や思想の自由として尊んでいる特徴が、ここでは裏面から見られ、むしろ欠点だと非難されているのである。ギリシアにおいては、古典期以来、学者や知識人は世襲的なカーストの如きものを形成していたわけではなく、自由な市民が各自の選択によって、興味の赴くままに学問の道へ進んだのであった。それゆえ哲学などを始めるのは、十分に物心がついてから以後のことである。そのことは例えば Diogenes Laertios を一読すれば、明らかなことである。しかし、この自由の代償として、学問が素人的であったとか、生活費を自ら稼がなければならなかったとか、いろいろ困難な問題があったわけである。ギリシアの知識人の典型は Sokrates であり、彼においては哲学と貧困とが不可分のものとして結びついていた。学者は何故このように貧困でなければならなかったのか。

この論文においては、なるべく多くの知識人、主として哲学者について、その経済生活の実態を具体的に検討し、そこに見られる一般的な傾向を明らかにしたいと思う。しかし、この問題について利用することのできる史料は、主として紀元後3世紀前半頃の Diogenes Laertios の『有名な哲学者たちの伝記と学説』(*Βίοι καὶ γνῶμαι τῶν ἐν φιλοσόφοις εὐδοκίμησάντων*) 10巻である。本書は、紀元前3世紀以後の多くの学者たちの著作に直接または間接に依拠して書かれている。即ち、Karystos の Antigonos (ca 290—239 B.C.), Smyrna の Hermippos (前3世紀), Alexandria の Sotion (前2世紀前半), Rhodos の Sosikrates (前2世紀), Athenai の Apollodoros (前2世紀中頃), Alexandros Polyhistor (前1世紀), Magnesia の Demetrios と Diokles (いずれも前1世紀) などである。Diogenes 自身がこれらの膨大な書物を直接に読破したとは考えられないので、どのような系統を経て最終的に要約されたのかという周知の難問がある²⁾。そして哲学者たちの言行について無数の逸話が物語られているが、それらの真偽の程度は極めて厄介な問題で

1) Eduard Schwartz, *Griechische Geschichtschreiber*, 1957, S. 49 = Pauly-Wissowa, *RE*, V, 672.

2) Diogenes Laertios についての研究史および文献については、R. Hope, *The Book of Diogenes Laertius. Its Spirit and Its Method*, 1930. 代表的な研究としては、Ed. Schwartz, op. cit. S. 453~491. = Pauly-Wissowa, *R.E.* V, 738~763.

ある。しかし、ここではかかる解決の見込みのない問題に踏み込むことは断念した。Diogenes Laertios に次いで、Claudius Aelianus (ca A.D. 170—235)の逸話集 *Ποικίλη ἱστορία* (*Varia Historia*), Aulus Gellius (紀元後2世紀)の *Noctes Atticae* 20巻, Athenaios (紀元後3世紀初頭)の *Deipnosophistae* 15巻などに依拠することが多かったが、これらに含まれている逸話も、もちろん真偽不明のものばかりである。しかし私としては、これらの逸話の背後には歪められているにしても多少は事実の核があるものと考え、そこから知識人の生活の一般的傾向を探ろうと努めるのである。これらの逸話はあまりにも幼稚な内容のものであるから、普通のギリシア哲学史研究においては無視されてしまっている。従って管見の限りでは、このような面についての先学の研究はあまり見出されないようである。それゆえ主として古代人の遺した書物だけを頼りに、以下に考察を進める。

なお、これらの逸話には金額の単位がしばしば現れる。それらの関係は、6 oboloi = 1 drachme, 100 drachmai = 1 mna, 60 mnai = 1 talanton であり、換言すれば、1 talanton = 36000 oboloi である。貨幣の価値は時代とともに下落してゆく傾向があり、とりわけ Hellenismus の時代に入る頃に、流通貨幣の増大などによって大きな下落が起ったはずである。例えばアテナイでは、紀元前400年頃から Agyrrhios の提案によって、民会出席者に日当として 1 obolos ずつ支給されるようになったが (Arist. *Ath. pol.* 41, 3), 数年後の392年上演の Aristophanes の『女の議会』(292行)の頃には、3 oboloi に値上げされており、327年頃には 6 oboloi に増額された¹⁾。もちろん、この増額に正確に反比例して、貨幣価値が下落したわけではないけれども、このような背景を念頭におく必要はある。

第一章 初期の自然哲学者たち

Platon の対話篇に登場する Sokrates の言葉によれば、Thales や Bias など往古の賢人たちから Anaxagoras までは、誰も授業料として金銭を要求したりはせず、また不特定多数の人々の前で自分の智慧の見せびらかしをする者もなかったのだが、Protagoras や Gorgias や Prodikos など、いわゆるソフィストたちが、そのようなことを始めたのだという (Plat. *Hipp. Mai.* 282)。Thales や Bias など、いわゆる七賢人の段階では、智者であると同時に政治活動や経済活動にも関係していたのであって、専門的な知識人ではなかったから、彼らの場合には知識人に固有な形態での経済問題は、それほど明確には発生していなかったものと考えられる。「哲学」(*φιλοσοφία*)という言葉が初めて用いたと伝えられる PYTHAGORAS (fl. ca 530 B.C.) は、愛智を自己の生涯の課題としたようであるから、確かに一種の純粋な知識人であった。彼は Samos の宝石細工師 (*δακτυλιογλύφος*) Mnesarchos の子として生れたらしい (Diog. VIII, 1)。紀元前6世紀の Samos は、土木工事や手工業技術の面で先進的であり、繁栄を誇っていた (Hdt. III, 60)。それ

1) Busolt-Swoboda, *Griechische Staatskunde* II, 1926, S. 921. cf. Ferguson, *Hellenistic Athens*, p. 66.

ゆえ彼の生家も富裕であつたらしく、彼は知識を求めてエジプトやギリシア各地を旅行してまわつた。しかし帰国して見ると、祖国は Polykrates の支配下にあつたので、これを嫌ってイタリアの Kroton へ移住し、その政体を定め、彼の教団は大きな勢力をもつたと伝えられる (Diog. VIII, 2f.)。その教団の生活は、ピュタゴラス的な生活 (Πυθαγόρειος τρόπος) と呼ばれる特殊なものであつた (Plat. Resp. X, 600 b)。弟子たちは財産を共有し、生涯にわたって共同生活を続けるように定められていたという (Iambl. Vita Pyth. 80)。

この集団は、学者の集団というよりも、宗教的な結社の色彩が濃厚であるが、Platon のアカデメイア創設にも一つの模範になつたものと考えられる。この教団が知識人または宗教人の活動のために、特殊な経済生活を営まなければならなかつた事実は注目に価いする。そして財産共有を唱えていたとすれば、当然かなり貧乏な人間も、この学派に属していたものと思われる。Parmenides の師とされる Pythagoras 派の Ameinias は、6世紀末葉に活躍した人と考えられるが、「貧乏だが立派な人物」(ἀνδρὶ πένητι μὲν, καλῶ δὲ καὶ ἀγαθῶ) であつたと伝えられる (Diod. IX, 21)。もしも Ameinias が貧しい家に生れて、終始、貧乏であつたのだとすれば、Sokrates 以前の初期の知識人としては非常に珍しい例である。Pythagoras 派に属したからこそ、貧しいながらも活躍することができたのではないかと思われる。

次に登場するのは、Kolophon 出身の XENOPHANES (570—478 B.C.) である。「彼は祖国から亡命してから、シケリアの Zankle に住み、(そして Elea への植民に参加して、そこで教え)、さらに Katane にも住んだ」と伝えられる (Diog. IX, 8)。Zankle や Elea などで土地や家屋を所有したものと想像されるが、しかし彼自身が語るところによれば、その生涯は放浪の連続であつたかの如くである。

すでに六十と七年の間

ヘラスの地の到る所を我が思いを運びまわつた。

そして生れてから、その時まで二十五年。

もしも、これらの事柄を正しく語る事ができるとすれば。(Diog. IX, 18)

この言葉には恐らく相当な誇張があるであろうが、それにしても、このような漂泊の生活は如何にして可能であつたのか。もし彼に家産があつたとすれば、その管理は誰がしたのか。最初の亡命のときや、移住地から出るとき、家産を売却して現金を持って出たのであろうか。いろいろな疑問が浮んで来るが、証拠が乏しくて、何とも判断の下しようがない。しかし彼は各種の韻律で叙事詩や思想詩を書き、さらに「自作の詩を朗唱した」(ἐρραφώδει τὰ ἑαυτοῦ) とも伝えられている (Diog. IX, 18)。これが漂泊中の彼の収入源であつたものと思われる。紀元前7世紀後半の Arion は、堅琴を弾いて歌う名人であり、Korinthos の僭主 Periandros の庇護のもとにあつたが、さらに、イタリアやシケリアへ渡つて、その地で多額の金銭を儲けた (ἐργασάμενον δὲ χρήματα μεγάλα) と伝えられる (Hdt. I, 23~24)。抒情詩の時代の詩人たちは概して貴族階級に属してい

たから、その詩作によって金銭を得ていたとは考えられぬが、しかし Simonides (ca 556—468 B.C.) などは職業的な詩人として金銭を受取ることが多かったようである¹⁾。それにしても Xenophanes の場合は、文明批評的な厳しい内容の詩であったから、詩作や朗唱によって直接に金銭を稼ぐことは困難であったろう。

ここで考慮すべき事情は、ギリシア人の間では遠方からの旅人を歓迎する習慣があったということである。例えば Solon も、「子供らと馬どもと獵犬と異国の客人 (ξένος ἄλλοδαπός) のある者は幸福だ」と歌っている (fr. 23 West)。そして Alkinoos の王宮を訪れた Odysseus のように、宴席などへ招待されるのであったから、とりわけ賢明で見聞の豊富な人間が歓迎されたわけである。Xenophanes 自身の詩にも、はるかに質素な家にはあるが、遠来の客を迎えることが歌われている。

冬の季節に火の傍で柔らかい椅子にもたれて、
腹を一杯に満たして、甘い葡萄酒を飲みながら、
そら豆をつまみ、そこで語るべきことは、
「貴方はどなた？ そして、いずこから。何歳でしたか。良き人よ。
かのメディア人が攻めて来たとき、貴方の年齢は？」 (Athen. II, 54 e)

このような遠来の客が、もし詩人や知識人であれば、普通の人の場合よりも、はるかに厚く遇されたはずである。しかも後述するように、古代ギリシアでは船賃は意外なほど低額であった。とにかく Xenophanes のような知識人が、67年間も放浪の生活を送り、90歳を越えるまで生き続けることができたのである。そのような生活が可能であったところに、ギリシア文化発達の重要な条件があったわけである。なお、上に引用した詩の「かのメディア人が攻めて来たとき」というのは、一般に想定されているように、Kyros 大王の部将 Harpagos によるイオニア征服 (545 B.C.) を指すのであろう (cf. Hdt. I, 162~169)。そして、この事件が Xenophanes の亡命の原因であったものと考えられる。すでに見たように、Pythagoras も亡命者であった。専門的な知識人が誕生するためには、亡命によって祖国での普通の生活から切り離される必要があったようである。

Ephesos の HERAKLEITOS (fl. ca 500 B.C.) の経済生活については、あまり不思議な点はない。彼は Ephesos の法律制定を依頼されたり (Diog. IX, 2), 「王位」を兄弟に譲ったりしているから (Diog. IX, 6), 明らかに Ephesos の有力な家柄の出身であった。Ephesos 人を軽蔑し、人間嫌いになって、山地を放浪して草ばかり食べていたこともあるが、病気になって再び町へ戻ったと伝えられる (Diog. IX, 2~3)。彼の知的生活にとっても、日常の生活から離れることが必要であったらしいが、それは一時的な隠遁生活の形をとったわけである。祖国を遠く離れて旅行した形跡は皆無のようであり、その土地で死去して公共広場に葬られたと伝えられている (Diog.

1) C. M. Bowra, *Greek Lyric Poetry*, 2nd ed. 1961, p. 360.

IX, 4)。彼自身は同胞市民を軽蔑していたけれども、市民たちは彼を尊敬していたわけである。明らかに彼には自由に思索に耽るだけの資産があったはずである。しかも彼の学問の性格からして、彼には旅行して知識を集める必要もなかったし、ことさら師について学ぶ必要もなかったのである。「博識は知性を教育しない」とか、「自分自身を探究して、すべて自分自身から学んだのだ」と自ら言明しているからである (Diog. IX, 1; 5)。

Elea の PARMENIDES (fl. ca 475 B.C.) は、Platon の対話篇の題名にもなっており、450年頃にアテナイを訪れて、青年 Sokrates と会ったことになっている (Plat. *Parm.* 127 b)。エレア派の開祖として有名であるが、しかし彼の生涯についての伝承は非常に乏しい。Diogenes Laertios の、彼の生涯に関する部分は、わずか10行ほどに過ぎない。Xenophanes の弟子ともされるが、しかし実際には、むしろ Pythagoras 派の Ameinias に導かれて、静かな研究生生活に向うことになったのであり、この師の死後、彼を祭る社 (*ἱερόν*) を建てた。それというのも、Parmenides は富裕な名門の出身であったからだという (Diog. IX, 21)。とすれば、政治家としても活躍した可能性があり、事実、Speusippos によれば、彼は同胞市民のために法律を制定したということである (Diog. IX, 23)。

同じく Elea の ZENON (fl. ca 450 B.C.) は、Parmenides の愛弟子 (*παιδικά*) であったが、政治の世界でも活躍し、僭主政打倒の企てに参加して捕えられ、拷問を受けたが、共謀者の名を明かさず、凄烈な最後を遂げたと伝えられる (Diog. IX, 25~27. Diod. X, 18)。その家柄や資産については伝えられていないが、一般に僭主政への敵対者が貴族階級の人々であったことから考えて、彼も上層市民の一人であったものと思われる。自分の祖国を何よりも愛し、アテナイなどへも殆んど訪れることなく、一生を祖国で過したという (Diog. IX, 28)。ただし Platon の『パルメニデス』(127 b) によれば、彼は師 Parmenides に従って全アテナイ大祭 (*Παναθηναία τὰ μεγάλα*) にやって来たことになっており、「そのとき Zenon は40歳ほどで長身で容姿端麗であった」という。そして二人は城外の Kerameikos にある Pythodoros 家に滞在して、Zenon は青年 Sokrates などに自著を朗読して聴かせたという。この Pythodoros や Sokrates ばかりでなく、有名な Perikles も Zenon の講義を聴いたと伝えられる (Plut. *Pericles*, IV, 5)。このような機会に Zenon が自分から料金を要求したとは考えられぬが、しかし弟子が彼に多額の料金を支払ったという伝えはある。偽 Platon (*Alcib.* I, 119 a) によれば、上述の Pythodoros および Kallias は、「各々 Zenon に 100 ムナずつ支払って、賢明かつ有名になった」ということである。これが事実だとしても、Zenon の教えたのは自然学であったから、徳を教えると称したソフィストとは相当な違いがある。

Samos の MELISSOS (fl. ca 440 B.C.) は、Parmenides の説を継承したが、その家柄などについては伝えがない。しかし政治家としても活躍したらしく、提督 (*ναύαρχος*) に選ばれて、Perikles の指揮するアテナイ海軍と戦って大活躍している (Diog. IX, 24. Plut. *Pericles*, XXVI~XXVIII)。それゆえに上層階級の出身と見なしても間違いあるまい。

Akragas の EMPEDOKLES (fl. ca 450 B.C.) は富裕な名門の出身であった。同名の祖父は

第71回 Olympia 祭 (496 B.C.) に競馬で優勝したことがあり、名家の出であった (*λαμπρὰς ἦν οἰκίας*) と言われている (Diog. VIII, 51)。そして哲学者 Empedokles も、その財産によって (*διὰ τὸν παρόντα πλοῦτον*)、多くの貧しい市民の娘たちに嫁資を恵んでやったと伝えられている (Diog. VIII, 73)。その政治的な立場は、Zenon などに似て、僭主政に敵対的であった。Xanthos によれば、彼は質素な生活を愛したがゆえに、自分に提供された王位を辞退したということであり、Aristoteles はこの伝えに依拠して、「彼は自由主義者 (*ἐλεύθερος*) であって、あらゆる支配に反感をもっていた」と述べている (Diog. VIII, 63)。政治的な行動においては民主的であったが、その詩では「私はもはや死すべき人間ではなく、不死なる神として諸君の間を歩むのだ」などと歌っている (Diog. VIII, 66)。その超然たる態度は Herakleitos などと似ている。その死の模様についてはキリストの奇蹟にも似たことが伝えられているが (Diog. VIII, 67~69)、しかし Timaios によれば、亡命して Peloponnesos で死亡したため、死亡の事情が不明になったのだという (Diog. VIII, 71)。

Klazomenai 出身の ANAXAGORAS (fl. 460 B.C.) は、次に述べる Demokritos と並んで、富裕な家に生れながら財産には無頓着な学者の典型である。「彼には莫大な財産が遺されたのに、それには無頓着で、全部を無くしてしまったと言われている」ということである (Plat. *Hipp. Mai.* 283 a)。彼は「生れの良さと富の点で傑出してはいたけれども、しかし気前の良さでも傑出していた」ということであり、相続財産 (*τὰ πατρῶα*) の管理を怠っているのを家人 (*οἱ οἰκεῖοι*) に非難され、「それでは何故お前たちが管理しないのか」と答えて、彼らに財産を譲って、自分は退いて自然の研究に没頭し、政治のことは省みなかったという (Diog. II, 6)。ここで重要なことは、遺産を放棄することは、同時に祖国の政治からも離れることを意味したということである。彼は祖国を離れて、アテナイへ来て、そこに30年間も滞在したと伝えられるが、「貴方は祖国のことが少しも気にならないのか」と尋ねられて、「私は祖国のことを非常に気にしているのだ」と、天を指さしながら答えたという (Diog. II, 7)。彼は財産を譲ったけれども、一つの伝説によれば、結婚して子供が二人いたことになる。この子供たちが二人とも死んだと伝えられても、少しも動揺せず、「子供らが死すべき身であることは知っていた」と語ったということである (Ael. *Var. Hist.* III, 20)。

Abdera の DEMOKRITOS (fl. ca 420 B.C.) は、倫理学、自然学、論理学、数学、文芸学、音楽、医学、農学など、多方面で研究業績をあげた人であり、52点の著書の題名が伝えられている (Diog. IX, 46~48)。彼の学問は、政治活動や家業の傍らに片手間で果されるようなものではなかった。しかも、Anaxagoras が主として理論的な研究者であって、一所定住的であったのに対して、Demokritos は知識を求めて広く旅行する方法をとっていた。幾何学を学ぶためにエジプトへ赴き、カルデア人に会うためにペルシア帝国内を旅行し、さらに印度の裸体の学者たち (*γυμνοσοφισταί*) とも交わったと伝えられる (Diog. IX, 35)。印度まで赴いたとは考えられないが、とにかく広く旅行した人物であることは確実である。すでに Theophrastos も彼の研究旅行に言及していた。Demokritos が「Menelaos や Odysseus よりも良い蒐集品を集めて、遍歴したという理由

で Theophrastos も彼を賞讃している」という (Ael. Var. Hist. IV, 20)。なお Alexandria の Clemens の引用する断片 (Diels-Kranz, Fr. 299) では、Demokritos は「私は自分の同時代人の誰よりも広い土地を遍歴して、最も広く探究し、最も多くの空や陸地を見た、……」と自ら語っているが、この断片は Diels-Kranz により Unechte Fragmente の中に入れられている。

とにかく広く旅行して膨大な知識を集めたことは確かである。しかし彼は広く旅行していながら、ソフィストのように自分の知識で名声や金銭を得ようとはしなかった。Magnesia の Demetrios によれば、彼はアテナイへも行ったようであるが、しかし名声などは軽視し、人に知られることには熱心にならなかった。彼は Sokrates を知ったらしいが、しかし Sokrates の方は彼を知らなかったようである。「私はアテナイへ行ったが、しかし誰も私を認めなかった」と Demokritos 自身が語っているという (Diog. IX, 36)。もっとも、Phaleron の Denetrios によれば、彼はアテナイへは行かなかったのだということである (Diog. IX, 37)。いずれにしても、彼は広く旅行していながら、ソフィスト稼業をしたという痕跡を残していないのである。それゆえ古代の人々にとっても、彼の研究費や旅費の出所が特別な問題にならざるを得なかった。そして次のような説明が伝えられているのである。

彼は三人兄弟の一人であり、兄弟と遺産を分け合ったのであるが、彼は三分の一よりも少ない部分に相当する現金の部分を選び取った。この選択は、一つには兄弟たちが仕組んだことであったが、同時に Demokritos 自身が旅行するために、それを必要としていたのだという。その金額は Magnesia の Demetrios によれば、100タラント以上であったが、Demokritos はその全部を使い果たしたという (Diog. IX, 36)。そして Rhodos の Antisthenes によれば、彼は旅行から帰ったときには金は使い果してしまっていたので、兄弟の Damasos から援助を受けることになった。しかし彼の名声はあがり、市民の前で自分の著書のうち最高の作品『宇宙の大秩序』(ὁ Μέγας Διάκοσμος) を朗読したところ、500タラントンの賞金を与えられ、さらに青銅の像を建てて貰ったという。しかし Demetrios や Hippobotes によれば、この書物を朗読したのは、Demokritos 自身ではなく、その縁者たちであり、賞金も100タラントンであったという (Diog. IX, 39~40)。

以上の伝えに出て来る金額は、いずれも大き過ぎて信じがたい。遺産分割で受取った100タラントンも、500または100タラントンの賞金も。ペロポネソス戦争に突入する頃、即ち黄金時代のアテナイの歳入は、国内および国外からのものを合せて、総額1,000タラントンを下らなかったと伝えられるが (Xen. Anab. VII, 1, 27)、これはギリシアの都市国家の歳入としては異例の規模であった。その半分または十分の一の賞金を Abdera の国庫から支出することができたとは思えない。しかし上記の伝説には、多少は事実の核があったものと考えられる。というのは、あの主著朗読の事情については、次のような別伝もあるからである。即ち、Abdera の市民たちが Demokritos に対して、相続財産 (τὰ πατρῶα) を失ってしまった事情を公的に審問したところ、彼は『宇宙の大秩序』と『冥界論』(περὶ τῶν ἐν Ἄιδου) とを朗読し、これらのために消費したのだと答えたので、放免されたというのである (Athen. IV, 168 b)。この伝説も全面的に事実であるかどうか問題はあがるが、しかし、その背後には、市民の相続財産の消失が、国家にとっても重大な問題であ

ったという事情がある。Demokritos や前述の Anaxagoras の如く、経済に無頓着な学者が出て、家産を無にしてしまうことに対しては、一族や国家の側から抑制が作用していたわけである。換言すれば、普通の市民である限り家産を管理する責任があるので、学問に徹することはできなかった。Anaxagoras や Demokritos はこの責任や権利を放棄したのである。

第二章 歴史家の場合

哲学者とは性格の異なる人間類型であるけれども、ここで参考のために有名な歴史家の場合を取上げて見ることにする。

HERODOTOS (fl. ca 445 B.C.) は、Suda 辞典の「ヘロドトス」の項によれば、Halikarnassos の上流階級の家にも生れたが、僭主 Lygdamis との抗争のゆえに Samos へ移り、やがて帰国して僭主追放に成功したものの、市民たちに嫉まれて、アテナイの植民市 Thurioi へ移住したという。それゆえ彼は生涯の大部分を亡命者として過したわけであり、その間に三大陸にまたがる大旅行を敢行したことになる。彼自身はその旅行の経路も範囲も明確には説明していないので、正確なことは決定できないが、しかし少なくとも次の地点までは行ったはずである。まずエジプトでは、Memphis から Thebai や Heliopolis を経て (II, 3), 南端の町 Elephantine まで溯航した (II, 29)。また海路でフェニキアの Tyros まで調査に行ったことがあり (II, 44), さらにアラビアの或る地方へも調査に赴いたと言う (II, 75)。また Libya の沿岸のギリシア人の植民市 Kyrene を訪れたこともある (II, 181)。次に東方では、Euphrates 河を下って Babylon へ達し (I, 185), Bel の神殿の巨大な塔 (Babel の塔) にも登り、Babylon の知識階級カルデア人 (Chaldaioi) とともに接触している (I, 181)。北方では、黒海の入口 (Byzantion のあたり) は無論のこと、黒海北岸の Exampaios という土地へも赴いている (III, 81)。その方面の有力な植民市 Olbia を根拠地として、Scythia の事情を調査したらしい (IV, 16~17)。エーゲ海の北部では、Thasos 島へ行ったことがあり (II, 44; VI, 47), また Samothrake へも行ったはずである (II, 51)。

以上に記したのは、絶対に確実な旅行範囲であって、実際にはさらに広く遠くまで旅行したはずである。いずれにしても、一介の亡命者がこれほど広く旅行したとすれば、その費用はどこから得られたのか不思議に思われる。この点に関係して次の三つの事情を考慮に入れる必要がある。

第一に注意すべきことは、当時の船賃が非常に安かったという点である。Herodotos が活躍した紀元前5世紀中頃の碑文 (IG, 1², 40) によれば、船賃が次のように定められていた¹⁾。

Chalkis から Oropos へ船で運んでやった場合には、2 オボロス²を請求せよ。

Oropos から Histiaia へ、または Histiaia から Oropos へ運んだ場合には、1 ドラクメ³を請求せよ。

1) Hill-Meiggs-Andrewes, *Sources for Greek History*, 1951, pp. 302 f.

Chalkis から Histiaia へ送ってやった場合には、4 オボロス を請求せよ。

この場合は特別な公定料金のようなものであるが、しかし、普通の自由料金の場合でも大差はなかった。Platon の対話篇中で Sokrates は次のように語っている。

もし Aigina 島からこの土地（アッティカ）まで無事に送り届けたとすれば、それに対しては僅か 2 オボロス 請求するだけだと思し、またエジプトや黒海地方からの場合であれば、それだけの親切に対して、即ち今も言ったように、当人も子供たちも財産も女たちをも無事に送り届けて港へ上げておきながら、それに対しては多くを請求したところで、2 ドラクメまでだと思う。(Plat. *Gorg.* 511 d~e.)

当時の船賃は、吾々から見て安いと感じられるばかりでなく、当時の人々にとってさえも安いものの代表であつたらしい¹⁾。因みに、5 世紀末頃のアテナイでは、職人や労働者の日当は普通 1 ドラクメほどであった²⁾。そして 422 年上演の Aristophanes の『蜂』(300~301) によれば、その半分の 3 オボロス で親子 3 人が最低限の生活を営むことができたようである³⁾。

Herodotos にとって 1 日分の旅費がどの程度かかったか推測して見よう。425 年上演の Aristophanes の喜劇『アカルナイの人々』(65~67) によれば、ペルシア大王の許へ派遣された外交使節の日当 (*μισθός*) が各々 2 ドラクメずつであった。そこに登場する使節たちは、Euthymenes の archon の年 (437/36 年) に派遣されて、のろのろ進んで 10 年後の 425 年に帰還したことになっている。これは日当を貰い続けて儲けるためであった。従って、実費はもっと少額でよかつたはずである。前 347 年における Philippos への第二回目の使節たちは旅行に三ヶ月を費すが、全体で旅費 (*ἐφόδιον*) 1000 ドラクメを受取っている (Dem. *de F. Legat.* 158)。使節の人数は 10 名であつたらしいから、各人の日当は 1 ドラクメ余りということになる⁴⁾。これらの例から見て、Herodotos の旅費は、1 日につき 1 ドラクメ程度で充分であつたのではないかと思われる。宿屋の料金も恐らく非常に安かつたはずである。見知らぬ旅人を歓待するのは、ギリシア古来の慣習であり、宿の提供は本来的には無料であるべきものであつた⁵⁾。

それゆえ、Herodotos が亡命するときに財産を処分して、例えば 1000 ドラクメの現金を得たと

1) Cf. E. R. Dodds, *Plato Gorgias. A revised Text with Introduction and Commentary*, 1971, ad loc.

2) Cf. H. Michell, *Economics of Ancient Greece*, 2nd ed. 1957, p. 131.

3) Cf. H. Michell, op. cit. p. 133.

4) R. C. Jebb, *The Characters of Theophrastus*, A new edition ed. by J. E. Sandys, 1909, p. 130.

5) 古代ギリシアにおける宿屋の料金については、その明確な額を私は知り得なかつたが、宿屋はギリシア語で *πανδοκείον* (万人を受入れる所) と言われ、あまり高級な設備ではなかつたらしい。Theophrastos は宿屋を営むこと (*πανδοκεῖσαι*) を、売春業や徴税業と並べて、賤しい仕事と見なしている (*Char.* VI, 5)。従って宿屋の料金は非常に安かつたものと推定される。Polybios (II, 15) によれば、イタリアの或る地域では食糧が非常に安く、宿泊料は、客の必要とするもの全部を提供して一人一日につき *ἡμισσόβριον* 即ち 1/4 obolos に過ぎなかつたという。この Polybios の説明から、ギリシアの宿屋では客が自分の必要とするものだけを個々に注文して料金を契約するのが普通であつたことが知られる。従って安く済ませることも出来たわけである。Herodotos の頃にも一泊につき 1 obolos 以下かと思われる。ただし、人眼の届かない僻地の宿屋では、たどりついた客を温く迎えながら、捕えて身代金を要求したりすることも稀ではなかつたらしい (Plat. *Legg.* 918 d)。旅人を友として歓迎するのは、古くからのギリシアの慣習であつた。宿屋はその当然の義務の代償として金銭を要求するから、それだけでも軽蔑に値したのであろう。多少とも名声や縁故のある者ならば、宿屋などへは泊らず、普通の人の家へ迎えられたものと考えられる。

すれば、1日分の旅費を1ドラクメとして、それだけで3年間ほど旅行してまわることができたはずである。後述するように、Sokratesでも自分の家や土地を全部売れば、5ムナ即ち500ドラクメにはなるのであった。Sokratesの対話の相手役のKritobulosの資産は、その100倍以上に売れると言われている(Xen. Oecon. II, 3~4)。

第二に、その上、Herodotosの旅行は貿易を営みながらの調査旅行であったという可能性も強い。Herodotosの著作そのものには、このことを暗示する言葉は見られないけれども、一般的に見て、その可能性は十分に考えられる。Plutarchos(Solon II)によれば、Solonは若い頃から貿易(ἐμπορία)に乗り出したが、その当時は、職業による差別はなかったし、殊に貿易は尊重されていて、Thalesや数学者Hippokrates(紀元前5世紀Chiosの人)も貿易を営み、またPlatonの旅行の費用はエジプトでオリーブを売ることから得られたという。このPlutarchosの言葉はやや不正確であり、もちろんSolonの時代とPlatonの時代とでは貿易に対する評価は変化している。それにしてもギリシア人は、祖国にあっては土地所有者として生活しているけれども、ひとたび国外へ出れば自動的に商人または営利的な人間に転化する傾向があった。このことは次の章で詳論することにする。さて、Herodotosの場合、その旅行の範囲は、地中海や黒海の沿岸およびナイルその他の大河川の岸の近くに限定されており、内陸へ深く徒歩旅行したとは考えられない。要するに、当時のギリシア人の貿易路に沿って旅行していたわけである。主として船による旅行であったから、荷物を運ぶのも容易であったはずである。しかし、物資を扱うのは、恐らく遠い異国との間であって、ギリシアの主要な都市を訪れる場合には、むしろ自分の研究成果によって利益を得ていたのではないかと思われる。

ここに考慮すべき第三の点がある。Herodotosの時代には今日のような出版業は成立していなかったから、もちろん著作権による収入はなかった¹⁾。著作を公表する手段は、第一に著者自身があちこちで朗読することにあつた。それゆえHerodotosの文体そのものが、口頭で発表するのに適した構造になっている。もちろん著作が最終的に完成する以前にも、あちこちで部分的に発表していたはずである。Markellinos(Vita Thuc. 54)によれば、「あるときHerodotosが自分の歴史を発表したとき、その朗読の場にThukydidēsが居合せて、それを聴いて落涙した。すると、人々の言うところによれば、Herodotosはこれを見て、父のOlorosに向つて、《おおOlorosよ、貴方の息子の天性は学問への熱望で脹れています》と言つた」ということである。Suda辞典のThukydidēsの項にも類似の話が記されているが、その朗読の場所はOlympiaだとされている。この話そのものは恐らく後世の作り話であろうが、その背景にある朗読の慣習そのものは事実であろう。このように著者自身が発表して喝采されることによって、今日のベストセラーのような効果が得られたわけである。今日のように出版によって流布しないだけに、著者自身の朗読の効果や意味は大きかつたはずである。朗読すれば必ず現金収入があつたとまでは考えられないが、しかし朗

1) Sokratesの時代には、Anaxagorasの著作などは誰でも1 drachmeで買うことができたと言われている(Plat. Apol. 26 d)。当時、書物は意外に安かつたのである。従つて著者が自分の書物売るよりも朗読して聴かせる方が有利でもあつた。

読によって有名になれば、各地で名士として遇されるわけである。周知のように、Herodotos はアテナイでは Perikles や Sophokles などと親交があったものと想定されている。さらに国家もまた、そのような有名な人物には賞金を出すことがあった。「無名ならざるアテナイ人 Diyllos がその歴史で語っているのによれば、Herodotos は Anytos の提案によって Athenai から贈物(δωρεάν)として10タラントンを受取った」ということである(Plut. *de Herod. malign.* 26)。Eusebios の *Chronica* (tr. Hieronymus) の Ol. 83, 4 (445/4 A.C.) の所に、《Herodotus cum Athenis libros suos in concilio legisset, honoratus est》と記されているから、その発表の場所はアテナイの民会(concilium)であった。かかる賞金の前例としては、Pindaros がアテナイを Hellas の砦だと讃える詩によって、proxenos に任じられるとともに、1000ドラクメの賞金を与えられたことが伝えられているが(Isoc. *Antid.* 166), Herodotos の賞金はその60倍であって、相当な大金である。前述のように、その頃のアテナイの歳入の総額は1000タラントンほどであったから(Xen. *Anab.* VII, 1, 27), Herodotos の賞金はその1パーセントに当る。Pindaros の詩も Herodotos の歴史も、ペルシア戦争中のアテナイの功績を讃える内容のものであるから、アテナイ人の愛国心に適合したのであろう。Herodotos の研究そのものに対する賞金という意味があったかどうかは問題である。しかし、その額が大きいのは、彼の著作の内容の豊富さとか調査範囲の広さとかを考慮して、案外に合理的に評価されたのかも知れない。そして文化功労者に対する年金のような意味がこめられていたものと思われる。

次にアテナイの歴史家 THUKYDIDES (fl. ca 420 B.C.) は、「Thrake にある金鉱の採掘権をもって、その地方の有力者たちの間に勢力があった」と自ら述べている(IV, 105)。それゆえ一面では企業家であり、もちろん非常に裕福であったはずである。しかし彼は424年に将軍として Amphipolis 救援に赴いて、不運にも任務を果せなかったため、それ以後は終戦まで20年間も亡命生活を送ることになる。

ところで私は、その間(戦争の継続した27年間)初めから終りまで生き続けていたのであり、年齢的にも判断力があり、また正確に知るために精神を傾注していたのである。さらに私は Amphipolis で将軍として務めた後、20年間、祖国から亡命することになった。そして両側で行なわれていたこと、とりわけ亡命のおかげでペロポネソス人の側のことに親しく接して、静かに一層よく見聞することになったのである。(V, 26, 5)

このようにして Thukydides も亡命によって公務から離れたために、かえって静かに研究に没頭することができたのである。しかし20年間もの亡命生活の間、生活費や旅費をどこから得ていたのだろうか。Thukydides の場合は、その著作の内容や性格から見て、朗読して儲けになるようなことはなかったであろう。彼自身が序文で述べているように、それは「物語めいていないから、恐らく聴いて余り面白くないと感じられるであろう」ということであり、「一時の聴衆の喝采を争うためではなく、永遠の財として書きまとめられたもの」だという(I, 22, 4)。この文章は明らかに朗読によって人気を博していた Herodotos を意識して書かれたものであろう。このように傲然

たる態度を取り得たのは、彼自身の気質もあろうが、朗読などをしなくとも、独立的に生きてゆく財力があったためであろうと推測される。恐らく亡命の際に相当な金額を持って出たことであろうし、その後も Thrake にある自分の財産を利用することができたのかも知れない。古代からの伝えによれば、彼は Thrake の有名な金鉱地域 Skapte Hyle に住み、そのプラタナスの樹の下で著作したという (Plut. *de exilio* 14; Markellinos, *Vita Thuc.* 25)。そして亡命中も大金持であったとも言われている (Markellinos, *op. cit.* 19~20, 24)。これらの伝えは、すべて後期古代人の想像の産物であるが、しかし亡命中も金持であったという点は確かなようである。

Thukydidés の書き残した部分から書き始めてギリシア史を記述したアテナイ人 XENOPHON (ca 426—354 B.C.) は、そのほかにも多種多様な書物を残しており、普通の歴史家という概念だけでは扱えきれない人物である。また年代的には、後述する Isokrates や Platon と同じ世代に属しており、幼少の頃から青年期までをペロポネソス戦争下に過している。このような歴史的背景を顧慮して、むしろ第5章あたりで Sokrates の弟子の一人として取上げるべきだとも思われるが、この論文では歴史家という類型の中へ入れて、ここで扱うことにする。

Xenophon は恐らく相当に豊かな名門に生れたものと想像される。その著作『家政者』に Sokrates の相手として登場する Ischomachos という人物は、自分の父の農業経営の方法を説明している。即ち、放置されて不毛になっている農地を安く購入しては、これを改良して高価にして売り、さらに安い土地を購入するという方法を繰返したものであり、そして Ischomachos にも、この方法を教えたものだという (Xen. *Oec.* XX, 22~29)。ここに描き出されている熱心な農業経営家の像は、決して空想の産物ではあり得ず、恐らく Xenophon 自身の父 Gryllos をモデルとして描かれたものだとも想像されている¹⁾。いずれにしても Xenophon は農業経営に熱心な家庭に育ったことは確かだと思われる。彼は壮年期の多くを軍人として過し、後半生は突然に大規模な農業家に転じている。少年期や青年期に父親から、農業経営の方法を教え込まれていたからこそ、それに成功したのであろう。

さて、Xenophon は若い頃、Socrates の弟子でもあった。しかし Sokrates のような学究生活には順応できなかったようである。とにかく Boiotia 出身の友人 Proxenos に誘われて、ペルシア王弟 Kyros の傭兵となり、有名な内陸遠征に参加することになる。この Proxenos は若い頃から大志を抱いて、かの Gorgias に料金 (*ἀγρόριον*) を支払って学び、その上で名声と権力と財産を得るために Kyros と行動を共にすることにしたのだという (*Anab.* II, 4, 16~18)。Xenophon は Proxenos から誘いの手紙を受取ると、それを Sokrates に見せて相談し、Delphoi の神託を伺った上で、Kyros のもとへ赴いたのであった (*Anab.* III, 1, 4~10)。この遠征は意味のない惨めな結果に終るが、黒海南岸の Kerasos へ引返したところで、捕虜売却による金銭を生き残った兵士8600名に分配した。ただし、その総額の10分の1は Apollon および Ephesos の Artemis に

1) Éd. Delbecque, *Essai sur la vie de Xénophon*, 1957, p. 25.

捧げるために残しておき、Xenophon を含めた指揮者たち (οἱ στρατηγοί) の間で分配して、各自で奉納の任務を果すことになった。捕虜売却の収益の総額も、指揮者の人数も記されていないけれども、このとき Xenophon に託された金額は相当に大きいものであったと想像される。さて Xenophon は、Apollon への分で何かを作らせて、Delphoi のアテナイ人の宝庫へ奉納したが、Artemis への分は、現金のままで Artemis 神殿の宮守りに預け、彼自身は配下の傭兵隊を率いてスパルタ王 Agesilaos の指揮下に入り、Thebai との戦争に参加する (Anab. V, 3, 4~6)。

ところが、このような Xenophon の行動が祖国アテナイの人々の反感を買ったらしく、彼は祖国から追放される。しかし、その反面では、Agesilaos やスパルタ人の支持を受け、Olympia の近くの Skillus に住まわせて貰うことになる。そして彼が Skillus に住んでいたとき、たまたま Artemis 神殿の宮守りが Olympia 祭典の見物を兼ねて訪れて来て、あの預けた金を返してくれたので、Xenophon はその金で Artemis 女神のために土地を購入し、祭壇や神社を建て、それ以後、毎年その土地からの収穫の10分の1を捧げて祭りを催し、その地方の男女も参加することになったという (Anab. V, 3, 7~13)。この土地の購入のために、どれだけの金額を当てたのか不明であるが、その土地の状況や産物については非常に具体的に自ら説明している。農作物の収穫があるほかに、牧畜もおこなわれており、川では沢山の魚が取れ、森には各種の野獣が住んでいて、豊かな猟場になっていると、誇らしげに述べている。まことに牧歌的な生活の場であった。なお、彼は亡命者ではあったが、以前から結婚しており、この地へ妻や二人の息子も呼び寄せて、一緒に住み狩りを楽しんだり、客人をもてなしたりしながら、著述にも耽っていたのである (Diog. II, 52)。かくて Xenophon はこの段階では著述家として非常に恵まれた条件のもとに生活することができたわけである。この牧歌的な静かな生活は、387年から379/8年まで、約10年間は続いた。しかし、やがて Agesilaos の勢力は衰える。また Skillus はもともと Elis 人の領域内にあったから、彼らの攻撃に遇う。Xenophon は最終的には Korinthos へ逃れて、そこで晩年を過して死亡する (Diog. II, 53)。

このような Xenophon の生涯は、ギリシアの知識人としても異例のものだと言えよう。その著述活動を可能にした経済的な基盤は、結局は彼が傭兵の指揮者として小アジアで略奪戦争をおこなったこと、しかも女神に奉納したはずの土地からの収益で生活することができたという特殊な事情に由来している。現代人の感覚で判断すれば、これは一種の公金横領のようなものであるが、当時のギリシア人の感覚では別に問題にされるべき事柄ではなかったらしい。もちろん購入した広大な土地で農業や牧畜を上手に経営することができたのは、Xenophon 自身の能力にもよっている。彼が家の経済に興味をもち、実際的な問題に精通していたことは、その著作『家政者』などからも知られる。将軍としても家政者としても有能で、しかも知識人として文筆活動に従事することもできた。彼は万能の才人であった。しかし、もちろん Platon などの哲学者ほど、全霊をつくして学問に専念したわけではない。また彼が軍人や家政者として活躍したとしても、祖国を離れ、さらには亡命者として生活していたのであって、祖国の政治に没頭したのでもなかった。古代ギリシア市民としては重大な点が欠落していたわけであり、その点では前述の Anaxagoras などと同様であ

ったのである¹⁾。

Xenophon とともに私たちは紀元前4世紀前半へ入り込んでしまったが、この第二章は言わば脱線である。次に私たちは再び紀元前5世紀へ戻り、この論文の本筋へ復帰することにする。

第三章 ソフィストたち

Abdera の PROTAGORAS (ca 484—ca 414) は、前述の Demokritos の同郷人であり、両者を結びつける逸話が伝えられている。それによれば、若い頃の Protagoras は一介の肉体労働者であった。Aristoteles の失われた著書 (*περὶ παιδείας*) によると、彼は運搬屋 (*φορμοφόρος*) を業としていたが、*τύλη* (荷物を縛って運ぶための肩当) を発明したという (Diog. IX, 53)。そして Epikuros の書簡 (*περὶ ἐπιτηδεύματων*) によれば、この発明を見て感心した Demokritos が彼を自宅へ連れて来て、文字を教えて秘書 (*γραφεύς*) にしたのだという (Athen. VIII, 354 c. cf. A. Gell. *Noct. Att.*, V, 3)。もしも、この逸話が真実だとすれば、彼の生涯は非常に特殊な経路をたどったことになる。しかし彼が Demokritos の弟子になったという点さえも、両者の年代関係から見て無理のようである。Platon や Aristoteles など、比較的に確実な証人を重視すれば、Protagoras は Demokritos よりも20歳ほども年長であったらしいからである²⁾。彼が貧しい家に生れたと想定することに対しても、むしろ反対の証言がある。その父 Maiandrios は、Thrake 地方の多くの人々に傑出して財産を蓄えていたので、遠征途上の Xerxes を家に迎えたとも伝えられているのである (Philost. *Vitae sophistarum* I, 10, 1)。しかし父がもし資産家であったとしても、Protagoras 自身は家郷にあって資産を立派に管理していたとは考えられない。Platon (*Meno* 91 e) によると、彼は40年間もソフィストの技術に従事し、ほぼ70歳になって死んだという。90歳という伝えもあるが、いずれにしても彼の後半生はギリシア各地の遍歴で過され、死亡したのも旅行の途中であったと伝えられる (Diog. IX, 55)。この長年の放浪という点で前述の Xenophanes と似ているが、しかし Protagoras の場合は放浪に出た原因や動機が推測できない。

Protagoras は自ら *σοφιστής* と称し、徳の教師 (*ἀρετῆς διδάσκαλος*) として料金 (*μισθός*) を要求した最初の人物である (Plat. *Prot.* 349 a)。その授業料は100ムナであったと伝えられ (Diog. IX, 52)、「あれほど明らかに美しい作品を制作した Pheidias よりも、また他の彫刻家10人を合せたよりも、多くの財産を彼はその智慧によって獲得した」とも言われている (Plat. *Meno* 91 d)。100ムナ即ち1万ドラクメという授業料は、Sokrates の所有する家や土地を売却した場合の金額の20倍に相当し、驚くべき高額であるが、次に述べる Gorgias の場合と同額であるから、恐らく事実であったものと考えられる。弟子になるのは、もちろん金満家の子弟に限られていたはずである

1) Herodotos, Thukydidēs および Xenophon がいずれも亡命者として歴史を書いていること、その他にもギリシアの歴史家には亡命者が多かったことに注目する必要がある。

2) K. Freeman, *Companion to the Pre-Socratic Philosophers*, 3rd ed. 1953, p. 344.

が、Platon によれば、Protagoras の弟子になって賢明にして貰えるならば、自分の全財産はもちろん投げ出し、親しい人々から借金しても悔いなくと語る人々もいたのである (*Protag.* 310 e)。有名なソフィストには、それだけの需要があった。

シケリア島 Leontinoi の GORGIAS (ca 483—376 B.C.) は、Leontinoi が隣邦 Syrakusai の圧迫を受けたので、427年に首席使節 (*ἀρχιπρεσβευτής*) としてアテナイを訪れ、その弁論術によって民会を動かし、同盟締結に成功し、援軍派遣を約束させることができた (*Diog.* XII, 52)。そして「この人物は弁論術 (*τέχναι ῥητορικάι*) を初めて発明し、そしてソフィスト活動において (*κατὰ τὴν σοφιστείαν*)、その他の人々を大きく引離し、弟子たちから料金 (*μισθός*) 100 ムナを取ったほどである」と説明されている (*Diog.* XII, 53)。彼は祖国にあっては政界の指導的人物として親アテナイ政策を推進していたらしいから、彼は民主派に属していたはずである。ところが、Leontinoi では内紛が起り、423年頃には Syrakusai と結ぶ上層派が勢力を握ってしまった (*Thuk.* V, 4)。そのため祖国での Gorgias の政治的な立場は非常に困難なものとなり、恐らくこれが機縁となって亡命し、専らソフィストとして生活することになったらしい。そしてギリシアの各地を旅行し、Olympia や Delphoi で演説したこともある。晩年は Thessalia の Larissa でソフィストとして活躍した (*Plat. Meno* 70 b)。

次に PRODIKOS (前5世紀後半) はアテナイ南方の小島 Keos の人であり、しばしば公用でアテナイへ来て、公的には (*δημοσίᾳ*) 評議会で (*ἐν τῇ βουλῇ*) 演説して名声を博し、それとともに私的にも (*καὶ ἰδίᾳ*) 公開演説をおこなったり、青年と交わったりして、やはり驚くほどの金額を稼いだと伝えられる (*Plat. Hipp. Mai.* 282 c)。しかし彼の授業料は、Protagoras や Gorgias の場合に比較すれば、はるかに低額であった。そして種類によって定価に差があったという。Platon の対話篇で Sokrates は、彼の50ドラクメの講義 (*τὴν πεντηκοντάδραχμον ἐπίδειξιν*) を聴けば、名称の正しさについて充分の知識を得ることができるのだが、自分は1ドラクメのもの (*τὴν δραχμιαίαν*) しか聴講しなかったと、皮肉をこめて語っている (*Cratyl.* 384 b)。彼は「徳」というような大きな題目を掲げず、小さな主題を定めて、こまかく稼いだようであるが、しかし、それだけに営利活動は露骨であったらしい。Philostratos によれば、「彼は名門の子弟や富裕な家の子弟を狩ろうと追いかけて、しかも、その狩りのために外人代理人 (*πρόξενοι*) を抱えていた。というのも、彼は金銭に弱みがあり、快楽に溺れていたからである」という (*Vitae Sophistarum* 496)。

最後に Elis の HIPPIAS (前5世紀後半) は、とりわけスパルタへの外交使節として活躍したが、時にはアテナイへも来てソフィストとして活躍し、やはり相当な大金を稼いだ (*Plat. Hipp. Mai.* 281 a)。Platon の対話篇『プロタゴラス』は433年か432年頃のアテナイを舞台としているらしいが、そのとき富豪 Kallias 家には、Protagoras のほかに Prodikos と Hippias も滞在していたことになっている。Hippias はかつてシケリアへ行つたとき、非常に短い滞在中に150ムナ以上も稼いだし、また同島の Inykon という小さな土地においてさえ、20ムナ以上を儲けた。その金を家へ持って帰って父に与えたところ、父も他の市民たちも驚嘆したという (*Plat. Hipp. Mai.* 282 d~e)。

この Hippias の場合、外国へ旅行したときには、そこでソフィスト稼業をするけれども、祖国にいたときには、普通の市民として活躍しているだけであつたらしい。大金を見て、父や同胞市民が驚いたという上記の逸話から、そのように推察されよう。そして Gorgias や Prodikos の場合も、その点は同様であつたものと想定される。この三人はいずれも祖国の外交使節として活躍しているから、ある程度の資産があり、それによって生活していたものと考えられる。ところで、上に引用した Platon などの言葉によれば、彼らは三人とも外交使節として公用で外国へ派遣されたのであるのに、その相手国に滞在している間に、私的にソフィスト稼業をおこなっていたらしいのである。もちろん評議会や民会で演説するためには、それが召集されるまで待たされるはずであり、そのような公務の空白の時間を利用したのであろうが、それにしても注目すべき事実である。公務で出張する場合には、もちろん政府から手当が支給されるのが普通であつた。前述のように、425年上演の Aristophanes の喜劇では、ペルシアへの使節は各々1日につき2ドラクメの手当 (*μισθός*) を支給されている。少し時代は下るが、Theophrastos の『人さまざま』(XXX, 9) に食欲 (*αίσχρο-κέρδεια*) の例として、「公務で他国へ出張する場合に、国家から支給される旅費 (*τὸ ἐκ τῆς πόλεως ἐφόδιον*) は自宅に残しておき、同行する使節たちから借りること」が挙げられている。この場合、もしも同行使節が用立ててくれなかったとすれば、外国で何らかの営利活動をするようになる。当時のギリシアでは、外国へ旅行した場合には、貿易その他、何らかの経済活動をおこなうのが、むしろ普通であつたのではないかと思われる。Platon も遍歴時代にはエジプトでオリーブを売っていたのだと言われている (Plut. *Solon* II, 4)。それゆえ Hippias や Prodikos は、公務で出張した場合でも、その一般的な風習に従って、智的な営利活動をおこなつたのであろう。ギリシアの外交官が買収され易かつたのも、このような慣習や雰囲気と関係があろう。

その反面では同胞市民同志の場合には、青年に教育してやっても特に料金を要求しないのが普通であつたようである。Platon によれば、Gorgias や Prodikos や Hippias などは、「各々あちこちの polis へ赴いて青年たち——彼らにとっては同胞市民の誰とでも無料で交際することができるのに——を説いて同胞市民との交際をやめさせて、自分たちと交際させ、しかも報酬を支払わせ、そのうえ感謝させることができる」という (*Apol.* 19e~20a)。従ってソフィスト稼業は主として外国人相手の商売であり、海外貿易のようなものであつた。ギリシア人は自己の属する polis の中にある限りは homo politicus であるが、その外へ出ると、直ちに homo economicus に転化する傾向があつたのである。

しかし、かかる放浪する知識人が実際に大きな財産を蓄えることができたかどうか、その点には問題がある。第一に、同じく sophistēs と称する者の中にも、非常に大きな隔差があつた。前述のように、Protagoras および Gorgias の授業料が100ムナと伝えられるのに対して、Prodikos の場合は、50ドラクメとか1ドラクメとかの段階があり、比較的安かつた。Sokrates の裁判の頃、Paros 出身のソフィスト Euenos がアテナイに滞在していたが、その授業料は5ムナであつたという (Plat. *Apol.* 20b)。Protagoras や Gorgias に比較すれば、遙かに低額であるが、これでも Sokrates の家屋敷全部を売つた場合の代金に相当する。このように有名なソフィストともなれば、

授業料は非常に高額であったが、その背後には多くの無名の、ほとんど授業料の取れないようなソフィストが多数いたはずである。アテナイの富豪 Kallias の家に Protagoras と Prodikos と Hippias が滞在していた際には、その家の門番は「ソフィストの群がその家へ押しかけるのに悩まされていた」という (Plat. *Prot.* 314 d)。しかし最も高額の授業料を取った Gorgias でも、直弟子の Isokrates によれば、大きな財産を残さなかったし、一般にソフィストの収入などは、それほど大きくはなかったという。

さて概して言えば、所謂ソフィストたちのうちで、誰一人として大金を蓄えた者が見出されないであろう。そのうちの或る者たちは貧乏しており、また他の人たちは中程度の生活を送っているに過ぎない。吾々の知る限りでは、最も多くを得たのは Leontinoi の Gorgias である。彼は Thettalia の辺りで暮したのであったが、当時そこの人々は、ギリシア人のうちで最も繁栄していたのである。そして彼は極めて長命であって、この金儲け仕事に没頭していたし、いかなる polis にも常住せず、公共のために散財させられたり、財産税を納めさせられたりすることがなかった。しかも妻を娶らず、子供を作らず、従って、この最も出費の多い恒常的な奉仕から免除されていた。それだけ他の人々に比較して多くの利益を得る条件に恵まれていたのであるが、それでも彼は 1000 スタテル (即ち20ドラクメ相当の金貨 1000枚分) を遺したに過ぎなかった。(Isok. *Antid.* 155~156)

この Isokrates の意見は、ソフィストの収入を小さく評価する方が、自分自身にとって有利な関連において述べられているので、多少の誇張があるかも知れない。しかし私たちの常識で考えても、妻子のない遍歴の生活には、かえって無駄な出費や危険が多かったはずであり、大きな財産を蓄えられなかったのも当然だと思われる。しかも絶えず対人関係を気にしながら生きることになるからある程度以上には学問を深めるのが困難であったはずである。

第四章 ソクラテス

SOKRATES (469—399 B.C.) の出現は、私たちの当面の問題にとって重大な意味をもつ。これまでの知識人は資産家であるのが普通であったが、Sokrates は学問にとって資産や金銭が必要条件でないことを身をもって示したからである。

さて、彼の父 Sophroniskos は *λιθουργός*, 即ち石屋か石材彫刻家であったと伝えられる (Diog. II, 18)。この人物は、Platon によれば、生前かの有名な政治家 Aristeides の息子 Lysimachos の親友であり、最も優れた人物であった (*ἀριστον ἀνδρῶν ἔντα*) とも言われている (Plat. *Laches* 180 e~181 a)。それゆえ Sokrates の父は、その職業の面でか市民としてか、とにかく相当な人物であって、多少の資産はあったものと考えられる。そして息子の Sokrates も424年の Delion での戦闘には、重装兵として従軍しているから (Plat. *Symp.* 220 e~221 a)、少なくとも当時までは、中流市民であったらしい。しかし Sokrates は家業に励んだのであろうか。Akropolis への登り口には Hermes 像と Charites 像が立っていたが、後者は Sokrates の作ということになっていた

(Paus. I, 22, 8)。これが事実だとすれば、Sokrates も彫刻家として収入を得ていたことになるが、しかし Platon や Xenophon の対話篇中の Sokrates は、彫刻家だとは言われておらず、話題が彫刻など職人仕事に関するときでも、Sokrates は完全に素人として振舞っている。Sokrates および彼の父が石屋であったとする伝えは、古い史料には現れないので、かなり疑わしいのである。Platon および Xenophon の描く Sokrates は、家業のことなど念頭になく、赤貧の生活を送っていたことになっている。私たちは、Sokrates の出自とか若い頃のことよりも、晩年の Sokrates らしい Sokrates の生活が、どのようにして可能であったのか、という点を主として問題にしよう。

その頃の Sokrates は赤貧の生活を送りながら、同胞市民からも外人からも一度も授業料を取らなかったという (Xen. Mem. I, 60)。これは、授業料を要求したり請求したりしたこと (ἐπραξάμην μισθὸν ἢ ἤτησα) はないという意味であろう (Plat. Apol. 31 c)。彼は常に祖国にあって、有為の青年を見つけては、これに恋愛して、むしろ自分から教育してやろうとするのであったから、もし彼が料金を取ったとすれば、売春のようなことになってしまうのである (Xen. Mem. II, 13)。さらに同胞市民を徳へと向かわせることは、神が彼に課した使命だと信じていた (Plat. Apol. 30 a)。彼が授業料を取らなかったのは、彼の独特の教育哲学や使命感から由来しているのであるが、それは祖国アテナイへの愛と絶対的に結びついていたのである。彼はその義務を果たすためにアテナイの公共の場で青年を相手に議論に耽った。彼が特に好んで時を過したのは、アテナイ東郊の Lykeion の体育場であった (Platon の対話篇 *Euthphro*, *Lysis* および *Euthydemus* 各篇の冒頭を見よ)。Sokrates の属する Alopeke 区の近くには Kynosarges gymnasium があったが (Hdt. V, 63, 4), Sokrates がそこへ行くのは Platon の名のもとに伝わる偽書『アクシオコス』(364 a) においてのみである。この gymnasium は完全市民でない庶子 (νόθοι) が主として使っていた所だからであろう (Plut. Themist. I, 2)。Sokrates が交わっていたのは主として血統正しいアテナイ人、それも主として上流階級の子弟であった。このようにして彼は常に祖国の価値体系の枠の中に留まっていたから、異国で活躍するソフィストのように営利的人間に転化する必要や機縁がなかったことになる。弱小国に生れた者ならば、知識を求めて旅行する必要があったであろう。しかし Sokrates はアテナイ黄金時代の人であるから、祖国に留まっても、Anaxagoras や Protagoras など、多数の異国人の到来によって、いつも刺激を受けることができたのである。

それにしても Sokrates の生活は誰の眼から見ても貧しいものであったらしい。Platon によっても、Xenophon によっても、その点は同様である。しかし経済的な事情についての両者の態度に多少の相違があり、Xenophonの方が明らかに正面から扱う傾向がある。例えば次のように説明している。

彼は精神および肉体を独特の生活様式によって鍛練した。それは、何か人智を越えた変事が起らぬ限り、どうにか元気に安んじて生活ができ、また、その程度の生活費ならば、誰でも工面できるような生活であった。実際、彼の生活は質素をきわめていたから、Sokrates の必用を充たすだけ取れぬほど、働きの少ない人間があるかどうか、私は知らないのである。彼は食事の分量を食事が楽しみである程度にとどめ、そのため彼が食事に向うときには、食欲が彼の

調味料となる用意ができていた。酒は咽喉が乾かぬ限り飲まなかったから、彼にはいつも美酒であった。(Xen. Mem. I, 3, 5.)

このような独特の生活の流儀を指摘すれば、それで古代人には十分な説明になったらしく、誰もこれ以上に Sokrates の生活について説明しようとはしなかった。私たちの不可解な点は、Sokrates 自身は食物をも節約するにしても、妻や子供たちの俵養はどのようにして可能であったのかということである。Sokrates は70歳で死刑になる時点においても、なお幼い二人の子供と青年期にある長男があった (Plat. Apol. 34 d, Phaedo 116 b)。Sokrates の妻 Xanthippe は鶯鳥のように喧しく夫や子供に小口ばかり言っていたらしいが (Diog. II, 36~37), しかし、その原因が特に家計の苦しさにあったとは伝えられていない。Sokrates が富裕な人々を招待しようとしたときに、Xanthippe が料理の貧しさを恥じたので、Sokrates がそんなことを気にするなと励ました話があるが (Diog. II, 34), そこで、Xanthippe が文句を言ったとは記されていない。Xenophon によれば、Sokrates の財産は家もろとも全部で5ムナに売れる程度であって、対話の相手 Kritobulos の財産の100分の1以下であったが、それでも Sokrates にとっては必要なものを供給するには充分であったという (Xen. Oec. II, 3~4)。Xanthippe も経済問題に関する限り、Sokrates に歩調を合せて、清貧の生活に甘んじていたものと思われる。

しかし Sokrates は他人の援助に頼らずに、完全に自分の資産だけで生活していたわけではない。Xenophon の対話篇中の Sokrates は、自分には友人たちがおり、彼らが非常に少し与えてくれるだけで、自分の生活は有り余るほど豊かになっているのだと語っている (Xen. Oec. II, 8)。多くの人々が Sokrates に贈物をしたがついていたのである (Xen. Apol. 17)。アテナイで祭りが催されていたとき、Alkibiades は名誉心に駆られて Sokrates のもとへ沢山の贈物を送ったけれども、Sokrates の方も名誉心を発揮して、これを受取らなかったと伝えられる (Ael. Var. Hist. IX, 29)。さらには、こちらで要求しなくとも、授業料を支払おうとする者もあった。

Sokrates の弟子のうちで最初に授業料を取ったのは、Kyrene 出身の Aristippos であるが、彼は自分で授業料を取ったばかりでなく、師に対しても20ムナを送ったことがある。しかし Sokrates はそれを送り返したということである (Diog. II, 65)。ところで、Sokrates の弟子でありながら、金銭を取っている点について人々が Aristippos を非難すると、彼は次のように答えたと伝えられている。

Sokrates にしても、ある人々が穀物と葡萄酒を送ったところ、その少量を受取って残りを返した。Sokrates はアテナイ人中の第一人者たちを執事 (ταμίαι) として抱えているけれども自分には購買奴隷の Eutychedes がついていただけなのだ。(Diog. II, 74)

異国出身の Aristippos の場合とは異なり、Sokrates には、アテナイの富裕な名士たちが何らかの形で援助者として付いていたわけである。例えば弟子として有名な Kriton はアテナイ人であり、Sokrates を熱烈に尊敬して、自分だけでなく、三人の息子たちをも Sokrates の弟子にならせ、Sokrates が「何一つとして不自由しないように、彼の世話をした」と言われている (Diog. II, 121)。この Kriton は、周知のように、あの裁判や死刑の際にも立会った。そして Sokrates

は裁判のときに、自分に支払える罰金の額は1ムナ程度に過ぎないけれども、そこに居た Kriton と Kritobulos と Apollodoros が30ムナを出してやると保証したので、それだけの罰金刑を自ら提案している (Plat. *Apol.* 38 b)。困っている友人を金銭的に援助することは、当時のギリシアの多少とも豊かな人間の喜びであったのである (e.g. Xen. *Oec.* XI, 9)。誰かが困窮していると、友人たちが直ちに扶助金 (ἐρανος) を集めてやるという慣習もあった (Theophr. *Charact.* XV et XVII)。それゆえ結論として、Sokrates の生計は恐らく、「相当の暮らしをしたらしい父親の遺産と、知人たちの合力によって、どうにか保たれていたのかも知れない」ということになるであろう¹⁾。Sokrates の生活は能動的にも受動的にも友愛 *φιλία* の原理によって支えられていたことになる。彼が青年たちと交わり教育するのは、愛によってであったし、他方では彼の経済生活は人々の友愛による援助によって支えられていたのである。ここには商業的な取引関係の入りこむ隙間がなかった。

第五章 小ソクラテス派

Sokrates 以前の知識人や哲学者は、ほとんど例外なく富裕な階層の出身であった。しかし5世紀末葉から貧乏な知識人が輩出することになる。その一つの原因は、Sokrates が窮乏の中にあって愛智を続けて模範を示したことにあるが、さらに他面ではソフィストたちが高等教育を一つの職業として成立させたためでもあろう。しかもペロポネソス戦争の結果、アテナイなどでは昔からの名家や資産家の多くが経済的に窮乏するようになった。例えば、Xenophon の『饗宴』は、421年に Kallias が催した酒宴の場面を描く作品であるが、そこに登場する Charmides (哲学者 Platon の母方の叔父) は、国境外の農地を失い、また国内の農地も収穫できなくなったから、外国旅行に出かけようと、国内に留まろうと自由になったと語っている (Xen. *Symp.* IV, 31~32)。家産を管理する義務から解放されて、かえって一種の自由を得たわけである。このようにして知識人や教師として生活しようとする者が出現する。後述するように、Isokrates はペロポネソス戦争のおかげで相続財産を失い、そのため職業的な教師となることになった (Isok. *Antid.* 161)。かくして、この時期に知識人の経済的な条件の面で一つの大きな変化が起ったのである。しかもペロポネソス戦争はギリシアの世界戦争であったから、この変化はアテナイばかりでなく、言わば全ギリシア的な現象であったと思われる。

Sokrates の弟子のうちには、Alkibiades などのように富裕な家の子弟もいたが、しかし相当に貧乏な者も弟子になっていたようである。例えば、Platon の有名な対話篇の題名ともなっている PHAIDON は、Elis の名家に生れたが、祖国が攻略されたときに捕虜となり、奴隷としてアテナイへ来て、売春宿の店番をさせられていた。しかし戸を閉めては Sokrates に親しんだため、Sokrates は Alkibiades や Kriton を説いて彼を買い戻して自由の身にしてやったのである

1) 田中美知太郎『ソクラテス』(岩波新書), pp. 25 f.

(Diog. II, 105. cf. A. Gell. *Noct. Att.* II, 18)。かくて Phaidon は自由人として哲学に励むことになるが、もちろん貧乏であったに相違ない。ただし、Sokrates の死後には故郷へ帰って、いわゆる Elis 学派を開くから、昔の財産を多少は回復したのかも知れない。また Megara 出身の EUKLEIDES も、Sokrates の臨終に立会った親しい弟子の一人であって、師の主知主義的側面を継承して、争論を主とする Megara 派の開祖となる。そして Sokrates の死後、Platon その他の弟子たちが政争を避けて、Megara なる彼のもとに滞在したと伝えられる (Diog. II, 107)。このように学友たちの世話をすることができたとすれば、彼は故郷では相当な資産家であったのかも知れない。

しかし、明らかに貧しい弟子たちがいた。これらの貧乏な弟子たちは、Sokrates ほどの名声や人気がないから、友人たちによる援助は少く、従って哲学を生業として稼がざるを得なくなる。とりわけ異国出身の弟子が稼ぐ必要に迫られる。前述のように、最初に師の主義に反して授業料を取ったのは、Kyrene 出身の快樂主義者 ARISTIPPOS であった。さらにアテナイ出身の弟子たちでも、異国へ出れば、僭主などの権力者や富者の保護を受けることになる。Aristippos, Aischines そして Platon は、師 Sokrates の死後、シケリアの僭主 Dionysiosのもとに赴いて、その庇護を受けていたことがあるのである。あるとき Dionysios は、自分のもとに滞在している Aristippos に対して、「哲学者は富者の門をたたくが、しかし富者の方はもはや哲学者の門をたたこうとはしない。その理由は何か」と問うた。それに対して Aristippos は、「一方は自分の必要とするものを知っているけれども、他方はそれを知らないからだ」と答えたという (Diog. II, 69)。この逸話がそのまま事実であるかどうか疑わしいが、しかし哲学者が富者や権力者に寄生するようになった状況を端的に示している。

Aristippos とは逆に、アテナイ人 ANTISTHENES (ca 455—ca 360) は、Sokrates の節制や質素な生活を継承した。父はアテナイ人であったが、母は Thrake 出身であったらしく、そのため彼は軽蔑されたりした (Diog. VI, 1)。彼はアテナイに三つある gymnasium のうちでは Kynosarges を選んで、そこで対話することになるが (Diog. VI, 13)、この体育場は庶出の人々 (οἱ νόθοι) の主として用いる所であった (Plut. *Themist.* I, 2)。資産の点はともかく、身分的には Sokrates などよりも低い地位にあったのである。もっとも Kynosarges の祭神は Herakles であったから、労苦 (πόνος) を尊重する彼の主義に相応しい場所であった。

さて Antisthenes は Peiraieus に住んでいて、そこから毎日 40 stadion (約 7.4 km) を歩いてアテナイへゆき、Sokrates の教えを聴いていたが、自分の弟子たちにも一緒に Sokrates の弟子になるように勧めたという (Diog. VI, 2)。そして彼自身はソフィストのように積極的に人々の前で教えることはしなかった。何故に少数の弟子しか持たないのかと尋ねられて、「銀の杖で彼らを追い出すからだ¹⁾」と答えたという (Diog. VI, 4)。Peiraieus に住んでいた関係で、彼の弟

1) 「銀の杖で」(ἀργυρέα ῥάβδω) という言葉の意味は判りにくい。単に「吟味して追出す」という意味に過ぎないのかも知れない。Otto Apelt の *Diogenes Laertius* 訳注 (1921) を参照せよ。

子には異国出身者、とりわけ Pontos 出身者が多かったようである (Diog. VI, 3; 9; 10)。しかし彼の生活は最低のものであった。「あるとき Pontos 出身の青年が、もし塩魚を積んだ舟が着いたならば、彼を厚く遇すると約束した。すると Antisthenes は彼を連れて、空の合財袋 (θύλακος) を持って粉屋へゆき、一杯に詰めさせて立ち去ろうとした。店の女が代金を請求すると、彼は《この若者の塩魚を積んだ舟が着いたなら、彼が支払うだろう》と答えた」と伝えられる (Diog. VI, 9)。このように Antisthenes は下層社会に生きていたらしく、その生活環境は Sokrates のそれよりも明らかに低かった。

なお、この Pontos の若者は塩魚の貿易をやりながらアテナイに留学していたわけである¹⁾。前述のように、当時の旅行者や外国留学者は、必ずしも十分な費用を持たずに出発して、途中や滞在地で稼ぐことが多かったらしいのであった。この Pontos の青年の行動も、そのことを証明している。Platon がエジプトで祖国アテナイの特産物オリーブを売ったのに対して、この青年は Pontos の特産物である塩魚をアテナイで売って、留学の費用を稼いでいたのである。天文学などの面で大きな業績をあげる Knidos の EUDOXOS (ca 408—355) も、若い頃は苦学生であった。祖国で窮乏していたが、Sokrates の弟子たちの名声を聞いて、23歳のとき友人の援助を受けてアテナイへ留学する。そして Peiraieus へ上陸して、毎日アテナイへ通ってはソフィストたち (Platon をも含めて) の講義を聴き、再び Peiraieus へ戻っていたという (Diog. VIII, 86)。これも苦学生の比較的に早い例である。

次に AISCHINES はアテナイ人であるが、父はソーセージ作り (ἀλλαντοποιός) であった。若い頃から努力家で、Sokrates に忠実に従っていたが、Sokrates の死後、貧乏ゆえに (δι' ἀπορίαν) シケリアへゆき、Aristippos の紹介によって Dionysios 王の知遇を得て、自作の対話篇を献じて、代りに贈物 (δῶρα) を受取った。その後アテナイへ帰国したが、Platon や Aristippos が有名になっていたので、敢てソフィスト稼業 (σοφιστεύειν) をする気になれず、代りに「有料の講義をおこなう」(ἐμμισθους ἀκροάσεις ποιῆσαι) ことにし、さらに被害者のために「法廷弁論」(λόγοι δεικανικοί) を書いたという (Diog. II, 60~62)。このようにして Aischines も、前述の Antisthenes と同様に、祖国で堂々とソフィスト稼業をするのは遠慮していたわけである。法廷弁論の代筆を業とするのは、人助けになることでもあり、それほど恥ずべきことではなかったらしい。なお、上述の逸話からも Aischines が Platon や Aristippos に圧倒されていたことが知られるが、さらに次のような逸話も伝えられている。「Aischines は貧乏であって、弟子も Xenokrates 一人しかいなかったが、これを (Platon が) 奪った」と (Athen. XI, 507 c)。

1) 生魚は食品として貴ばれたが、塩魚 (γάριχος) は安価で軽んじられていた食品である。Aristophanes の喜劇において、平和を締結した Dikaiopolis がいろいろな御馳走を食べるのに対して、主戦派の Lamachos は惨めにも、遠征軍の兵糧である塩魚などを食べることになっている (Acharn. 1101)。従って塩魚を商う者も、もちろん尊敬はされなかった。紀元前4世紀末の哲学者 Bion の父は解放奴隷であって、黒海北岸の Borysthenes で塩魚貿易商 (γαριχέμπορος) として生きていたが、その職業に相応しく、着物の袖で鼻をぬぐい、売春宿から妻を迎えたという (Diog. IV, 46)。Bion については本論文 104 頁の注 1 を参照せよ。なお、黒海方面における塩魚の生産については、Athen. III, 116 a~b を参照。

第六章 弁論術教師の場合

少し脱線になるけれども、ここで弁論家や弁論術教師について一言しておく。法廷弁論の代筆を「初めて職業にしたのは」(πρώτος ἐπὶ τοῦτο τραπέζης), アテナイ人 ANTIPHON であったが、彼の父 Sophilos は σοφιστής であり、彼は父から学んだのだという (Pseudo-Plut. *Vit. dec. orat.* 832 c)。彼は411年の寡頭派革命に大きな役割を果たして死刑になっているから、どちらかと言えば上流か少なくとも中流の家柄に属するはずであるが、ペロポネソス戦争のためであろうか、かなり窮乏していたようである。伝えによれば、いろいろ新奇な職業を考え出した人物である。彼は最初は悲劇などを書いてしたが、その頃に悩みを解消する技術を考案した (τέχνην ἀλυπίας συνεστήσατο) という (ibidem 833 c~d)。その方法は、「病人に対して医者が治療をおこなうのと同じようなもの」であって、悩める者に質問しては、その原因を探り出し、言葉で慰めてやるのであった。彼は Korinthos の agora の近くに家屋を整えて、広告を出して開業したが、やがて、この技術は低級で、自分には相応しくないと考えて、弁論術に転じたのである (ibidem 833 d)。

かくて Antiphon は現代の心理学者や精神病医がおこなうようなことを一つの技術として考え出したわけである。そして、それを職業としたのであるが、開業したのは Korinthos においてであって、祖国アテナイではなかった。この点に注目すべきである。彼はアテナイでは法廷弁論の執筆を業とすることになるのである。そして、その面では依頼者のために彼ほど役立ってくれる人物は存在しなかったと、Thukydides (VIII, 68) は賞讃している。

次には、有名なアテナイ人 ISOKRATES (436—338 B.C.) を取上げよう。彼の父 Theodoros は奴隷たちに笛を作らせて富を蓄えていたので、息子たちに十分な教育を受けさせることができた (*Antid.* 161. Pseudo-Plut. *Vit. dec. orat.* 836 e)。Isokrates の師としては Prodikos や Protagoras も挙げられるが、とりわけ Gorgias に親しく学んだことは確実である。前述の Gorgias の授業料は100ムナだとする伝えが正しいとすれば、そして Isokrates がこの高額の授業料を支払って弟子になったのだとすれば、彼の生家は非常に裕福であったわけである。しかし彼自身が述べているように、この父からの財産はペロポネソス戦争で全部を喪失してしまったという (*Antid.* 161)。そのため彼はいわゆる logographos として、法廷弁論の代筆を業とするようになったらしい。それらの弁論の写本が本屋に売られていたが (Dion. Hal. *de Isoc.* 18)、彼自身は後年になると当時のことに言及しなくなるので、その詳細は不明である¹⁾。父の財産が失われた上に、彼は生来、声が小さく臆病な性格でもあったから (*Panath.* 9~10)、自ら政界で活躍する方向へは進まなかった。その代りに演説を書いて他人に発表させ、それによって人々の意見を動かそうとしたが、それにも失敗したので学校を開くことにしたのだという (Pseudo-Plut. *Vit. dec. orat.* 837 a)。しかし最初に弟子を取ったのは、アテナイではなく、「Chios において」であった²⁾。その地で9人の弟

1) W. Jaeger, *Paideia* (Engl. ed.) III, p. 55.

2) ただし「Chios において」と訳した言葉の原文は ἐπὶ Χίου という奇妙な表現であり、そのため W. Jaeger などは、この伝説そのものを疑問視する (op. cit. III, p. 302, n. 32)。

子を得たのであるが、料金が数えられるのを見て、彼は涙を流して、「この人たちに吾が身を売ったことを私は今にして認識した」と語ったと伝えられる (ibidem 837 b)。それゆえ Isokrates にとっては、異国においてさえも、授業料を取ることは恥ずかしいことであった。彼はアテナイでは gymnasium などを利用せず、自分の家を学校とした。

彼の授業料は1000ドラクメと定められていたらしい。師 Gorgias の10分の1である。有名な Demosthenes は若い頃、熱心に聴講を望んだが、200ドラクメしか支払えないので、5分の1だけ聴講させて欲しいと頼んだ。すると Isokrates は、「Demosthenes よ、私は授業を切売りはしないのだ。みごとな魚を切らずに売っているように、君がもし学びたいのなら、私もこの技術を全体として君に売るので」と答えたという (Pseudo-Plut. 837 e)。しかし Demosthenes が Isokrates でなく、Isaios を師に選んだのは、孤児であったために、10ムナの授業料を払えなかったからだとも言われ、また別説では、Isaios の文体の方を好んだためだとも言われていた (Plut. *Demosth.* V, 5)。要するに確実なことは不明である。上記の「切売りはしない」という逸話も、Isokrates と Demosthenes という世代の異なる二大雄弁家が師弟関係で結ばれていない事実の理由を説明するために創作されたものかも知れない。この逸話とは矛盾するが、Isokrates は「同胞市民からは決して料金を要求しなかった」(πολίτην δ' οὐδέποτε εἰσέπραξε μισθόν) とも言われている (Pseudo-Plut. 838 f.)。この伝えのように、異国出身者だけから授業料を要求したのであろうか。とすれば、アテナイ市民からは任意の額を贈物として受取ったことになる。前述のように、一般にソフィスト業は外国人を相手として行なわれるのが普通であったのである。

弱小国出身のソフィストならば、あちこち遍歴して弟子を取る必要があったけれども、当時のアテナイは経済的にも文化的にもギリシア世界の中心であったために、Isokrates にとって諸国から学生を集めるのが容易であった。ただし、彼はアテナイの公共施設は利用せず、自分の家を学校にしていた。「彼の家 (domus) は、一種の学校 (ludus quidam) か、弁論術の仕事場 (officina dicendi) として、全ギリシアに開放されていた」と伝えられる (Cicero, *Brutus* 32)。彼自身が語っているところによれば、シケリアや黒海地方を含めてギリシア各地から多くの弟子が多額の費用を使い危険を冒して彼のもとへ集まった (*Antid.* 224; 226)。在学年限は3年か4年と定められていたが、多くの学生はさらに留年しようとしたという (ibidem 86~88)。Kyme 出身の Ephoros (未来の有名な歴史家) は、何ら為すところなく学校を去ったので、父親の Demophilos は二度目の授業料を持たせて、送り返した。すると Isokrates は戯れて、Ephoros を Diphoros (二度納める者) と呼んだという逸話が伝えられている (Pseudo-Plut. 839 a)。アテナイ出身者ばかりでなく、このように遠方からも多くの弟子が集まって来たから、Isokrates は祖国に居ながらにしてソフィスト業を営むことができたわけである。彼の弟子は100人にも及び、他のソフィストの誰よりも沢山の金を稼ぎ、三段櫓船奉仕 (τριηραρχία) の役も課された。この種の臨時の奉仕 (λειτουργία) や財産税 (εἰσφορά) は、アテナイ市民中の富裕者1200名にだけ課される負担であったが (*Antid.* 145), 彼はソフィスト中の第一人者として金儲けしたと見られ、この負担を課されたのであった。このように、いわゆるソフィストの一人と見なされることについて、82歳の彼が『アンティドシス』

で詳細に弁明し反論している。

彼の弟子は100人に及んだと言われているが、しかし彼は多数の人々の前での講演を嫌っていたので、大量生産的な教育はおこなわなかった。あるとき三人の聴講者が次々に来て重なってしまったことがあるが、そのときには三番目の学生には明日にしてくれと告げたということである (Pseudo-Plut. 838 e)。非常に能率の悪い教え方をしていたことになるが、彼の弟子としては、Konon の息子の Timotheos など、富裕な名門の子弟も多かったから、授業料とは別の贈物も多かったことと思われる。とりわけ Kypros の王 Euagoras の嗣子 Nikokles も彼の門下生であつたらしい。やがて即位した Nikokles に対して、論説を献上して、その代りに20タラントンという大金を受取ったと伝えられている (Pseudo-Plut. 838 a)。この金額が確かかどうか不明であるが、Nikokles から贈物を受けたこと自体は、Isokrates 自身も認めている (Antid. 40)。しかし Nikokles に宛てた論説は、王としての義務を教えるものであつて、手ばなしで讚美するような調子のものではない。

いずれにしても Isokrates は相当な資産を蓄えたものと思われ、また彼の門下からは Isaios, Lykurgos, Hypereides などの弁論家、Ephoros や Theopompos の如き有名な歴史家、Timotheos の如き政治家・軍人が輩出したから、その教育活動は経済的にも教育的にも大きな成功を収めたと言えよう。彼の学校それ自体は一代限りで終わってしまうけれども、修辞学の伝統を築いた功績は大きい。しかし私はここで弁論家という種類の知識人の系列については、これ以上は論じないことにする。弁論家は政治家などと区別しにくいので、純粹の知識人としては扱えないからである。次に再び哲学者の方に眼を転じ、Isokrates より少し後輩の有名な Platon から始めることにする。

第七章 プラトンとアカデメイア学園

PLATON (429—347 B.C.) は、非常な名門の出身である。母の Periktione は Solon に遡る家の出であり、父の Ariston はアテナイ最後の王 Kodros の血統を引いているという (Diog, III, 1)。Wilamowitz などは、Platon は名門の出であるとともに、かなりの資産家であったものと想定しているが¹⁾、しかし古代の伝承はむしろ逆の方向を指している。例えば Aulus Gellius が古書から抜書きして伝えるのによれば、「哲学者 Platon は家産の点では非常に貧しかったと伝えられている」という (Noct. Att. III, 17, 1)。その逆に Platon が富裕であったという伝えは見あたらないようである。昔からの名家でも、ペロポネソス戦争で大きな損害を受けた可能性もある。すでに述べたように、Platon の母方の叔父 Charmides や Isokrates は、かなり大きな害を受けたと伝えられている。Aelianus が「真偽のほどは不明だが」と前置きして伝えているのによれば、Platon は貧乏のために苦勞して (ὕπὸ πενίας……καταπονούμενος)、傭兵として外国へ出ようとしていたときに、Sokrates に出会ったので、それを放棄して哲学へ向つたのだという (Var. Hist.

1) 本論文96頁の注1を参照。

III, 27)。傭兵志望の話は、恐らくは Xenophon の場合からの類推によって作られたものであろうが、その前提となっている若い頃の Platon の貧乏は事実なのかも知れない。

通説によれば、Platon は若い頃には悲劇などを書いていたが、20歳で Sokrates の弟子になり、Sokrates の死後は国外に師を求めて、Megara, Kyrene, イタリア, エジプトを訪れた (Diog. III, 6)。さきに言及したように、その旅行の費用はエジプトでのオリーブ貿易によって得られたのだという伝えがある (Plut. Solon II, 4)。さらに Platon は生涯に三度もシケリアを訪れている。その第一回目は、上記のイタリア旅行と同時であろう。その地での弟子 Dion の求めに応じて、Syrakusai の僭主 Dionysios と会見したが、徳に優れていなくては、僭主の地位は無益だと述べたため、この権力者の怒りを買った。そして Dionysios の秘密の命令によって、Aigina 島で奴隷として売られることになり、さらに死刑にされそうにもなったが、たまたま滞在していた Kyrene 人 Annikeris が、20ムナまたは30ムナの身代金を支払って、祖国へ送り返してやったのだと伝えられる (Diog. III, 18~20)。この頃すでに Platon の名声がギリシア世界のあちこちに伝わっていて、熱心な支持者がいたわけである。第二回目の訪問は、367年に即位した Dionysios 2世のための師か顧問として招かれたのであるが、その地の弟子 Dion などへの友情のために、求めに応じたい。彼がシケリア島へ到着したときには、大変な歓迎を受け、華麗な宮廷馬車で海岸から宮廷まで送られたという (Plut. Dion XIII)。Dionysios 自身が御者となって、Platon を乗せて走ったとも伝えられる (Ael. Var. Hist. IV, 18)。しかし Platon は、Dion などのシケリア解放 (僭主政打倒) の陰謀に関係しているとの嫌疑を受け、やっとのことで帰国する。しかし Dionysios はなおも Platon との親交を求めて、Pythagoras 派の Archytas などを介して再度 Platon を招く。Platon は老齢でもあり気が進まなかったが、亡命中の Dion の立場を良くするために、もう一度シケリアへ赴く。Dionysios は非常に喜んで、Platon に多額の金を贈ろうと何度も言い出したが、その都度 Platon は辞退した。かの Aristippos がその場に居合せて、Dionysios も安心して気前よく振舞えると批評した。沢山貰いたがる人々には少ししか与えず、少しも受取らない Platon には沢山与えようとしたからである (Plut. Dion XIX)。しかし Dionysios と Dion とを和解させようという目的は、不成功に終り、やがて Platon は帰国する。

ところで、第一回シケリア旅行から帰ってから、Platon は Akademeia に学園を開くが、その近くに小さな土地 (χωρίδιον) を買って、そこに住んだ。そして、その土地の代金は3000ドラクメであったと伝えられており (Plut. de exilio 603 b)、あの命の恩人 Annikeris がその費用を負担したのだという (Diog. III, 20)。また Platon はアテナイで合唱団奉仕 (χορηγία) を務めたが、その費用は Dion が負担したのだと伝えられる (Diog. III, 3)。さらに Platon は Philolaos から Pythagoras 派の書物3巻を、Dion を通じて100ムナで購入しようとしたが¹⁾、これは、Platon が Dionysios から80タラント以上を受取って、裕福であったからだという (Diog. III, 9. cf.

1) 3巻の書物の価格が100ムナというのは高過ぎるようにも思われるが、しかし、これまで秘密にされていたピュタゴラス派の教説を、Philolaos が初めて公刊したものであった (Diog. VIII, 15)。従って、一種の貴重本であった。前述のように、普通ギリシアでは書物は比較的安価であった。

A. Gell. *Noct. Att.* III, 17, 1)。Platon は Dionysios との交際のゆえに犬儒派の Diogenes から嫌味を言われたりしたと伝えられている (Diog. VI, 25; 26; 58)。僭主からの贈物ではあるが、80タラントンという金額は大き過ぎるように思われる。しかし、とにかく彼が Dionysios 2 世から金銭を受取っていたのは事実であるらしい。さらに弟子の Dion から金銭的な援助を受けていた。Dion が非常に裕福であったことは、確かである。Dion には莫大な財産があって、その日常生活は僭主に匹敵するような人員や設備をもって営まれていたという (Plut. *Dion* XV)。

もちろん Platon は無節操に金銭を受取っていたのではない。そのことは Platon の第13書簡からも明らかである。もちろん Platon の現存13篇の書簡いずれについても、程度の差はあれ、偽作説があって、真偽が論争されている。しかも、この第13書簡の場合には、真作説と偽作説とが全く両極的に対立したままである。この書簡から知られる Platon は金銭問題などに細心で、しかも金銭の面で Dionysios 2 世に依存しようとしている。ここに見られる Platon 像は、低俗であって他の資料から知られる像と一致しないのではないか。偽作説の最大の根拠は、この点にある。しかし、この書簡は、当事者同志にしか関係のない事務的な小さな問題を扱っており、それだけに特別に偽作される必要もなかったはずだとも反論される。さらに、それに対する反論が出され、偽作の動機としては、Platon が Dionysios 2 世に金銭的に依存していたことを示して、Platon を貶めようとしたのだと主張されたりする¹⁾。しかし、それにしては貶しめ方が不徹底であり、この書簡に見られる Platon は、重要な点で自らの主義を貫いている。私自身はこの書簡を真作として扱うことにするが、もしも偽作だとしても、ここに見られる経済生活の流儀そのものは、実際の Platon の生活態度を多少とも反映したものであろう。というのも、全くの無から考え出されたにしては、あまりにも独特の生活態度が、そこに描き出されているからである。

さて Dionysios 2 世に宛てられた、この書簡のうち真中の部分 (361 a ~ 362 d) は、彼から贈られたか預ったかした金銭の用途の説明である。文章の展開は必ずしも明快ではなく、また、ここに見られる考え方は、私たちに理解し易いものではない。その内容を明確にするために、次に箇条書きにして示すことにする。なお、この書簡の執筆年代は、第2回シケリア訪問後、第3回訪問より以前であり、365年頃と想定される²⁾。

a. (361 a) 貴方が手紙で送って欲しいと言われるもののうち、Apollon 像は若い有能な工人 Leochares に作らせたので、Leptines が運んでゆくはず³⁾。

b. (361 a) その工人のところに別に立派な作品がありましたので、貴方の奥様に贈るつもりで買いました。健康のときも病気のときも、お世話下さったことに対する御礼です。

1) W. Neumann und J. Kerscheneiner, *Platon: Briefe*, 1967, S. 227. 真作説の代表的な例としては、G. R. Morrow, *Studies in the Platonic Epistles*, 1935, pp. 98~105.

2) O. Apelt, *Platons Briefe*, 1918, S. 146.

3) ここに登場する Leptines なる人物は、Dionysios 1 世の兄弟の Leptines (Plut. *Dion* IX) ではなく、ピュタゴラス派の同名異人を指すであろう。彼はその後、Dion を殺した Kallippos を Rhegion で殺すことになる (Plut. *Dion* XLVIII)。また Leochares なる彫刻家は、Paus. I, 3, 4 などでも、その作品が言及されており、かなり有名な工人であったらしい。

c. (361 a) お子様たちのために甘い葡萄酒12瓶と蜂蜜2瓶とを送ります¹⁾。

d. (361 b) 私どもは無花果を乾して貯蔵する時期には遅れて帰国しました。ミルテの実
は貯蔵しましたが、腐らせてしまいました。(従って、求めに応じられないというのであろ
う。) 今後は注意することにします。

e. (361 b)——以上のものの代金および国家へ払う税金(εἰσφοραὶ)のための金は、Lep-
tines から受取りました。

f. (361 b)——その際に Leptines に対して、真実と思われることを言いました。即ち、
Leukadia 船(Platon がシケリアから帰国するときに雇った船らしい)のために使った約16
ムナは、私のものであるはずだと。それで私はその金額を受取り、それを自分で使い、これら
のものを貴方に送りました。

g. (361 c)——アテナイにある貴方の金および私の金について、それらがどのようになっ
ているかを報告しますから、聴いて下さい。貴方の金は、あの時に説明しましたように、他の
親しい人々の金と同様に用います。即ち、なるべく節約して使いますが、しかし必要なだけは
正しく、また私および提供者である貴方に相応しいように使います。

h. (361 c~d)——現在のところ、私の方の事情は次の如くです。死亡した姪たちの娘が
四人おり、それぞれ適齢期と8歳と3歳と1歳未満です。この娘たちが結婚するまで、私が生
きているとすれば、私の友人たちと私とで嫁資を出してやらなければなりません。この娘らの
父親たちが私よりも金持になれば、その必要はなくなりませんが、現在のところ私が最も裕福な
のです。その上、彼女らの母親たちは、私が Dion などとともに嫁に出してやったのです。

i. (361 e)——さし当っては適齢期の娘を Speusippos (Platon の姉妹 Potone の息子)
に嫁がせるために、30ムナを必要としています。これは私どもに相応しい金額です。さらに
私の母が死亡すれば、墓を建てるために10ムナほど必要です。現在のところ、私の必要なのは、
これだけです。

j. (361 e~362 a)——貴方のところへ行くために公的または私的な出費が生じた場合
には、あの時にも申しあげましたように、私は極力節約しますが、不足分は貴方の負担となりま
す。

k. (362 a)——合唱団奉仕などのために、機を逸せずに私が出費しなければならない場合
に、貴方のために金を立替えてくれる代理人(ξένος)は、案に相違して、一人も居りません。
貴方からの送金を待っていて機会を逸しては、貴方の不名誉になります。

l. (362 b)——と申しますのも、貴方は必要の際には代理人(ξένος)である Aigina 人
Andromedes から請求せよと言われましたが、今度の費用のために人をやって頼みましたと

1) このような物品を海路はるばる送るのは馬鹿げたことだと思われるが、しかし当時でも必ずしも稀なこと
ではなかったらしい。Theophrastos が例示する愛想の良い人物(ὁ ἄρσεκος)は、Byzantion, Kyzikos,
Rhodos などの人々から依頼されて、アテナイの agora でラコニア犬や Hymettos 産の蜂蜜を買って、
わざわざ送ってやっている(Char. V)。前述のように、当時は船賃が非常に安かったのである。

ころ、彼は以前に貴方の父上のために立替えた金を返済して貰うのに苦勞したとの理由で、当然のことながら、少額しか出せないと申しました。

m. (362 b)——それゆえ私は Leptines に頼みました。彼は喜んで用立ててくれました。彼はこの点で賞讃に価いする人物です。

n. (362 c ~ d)——私は金銭のことを率直に説明します。そちらに滞在中に知ったことですが、貴方に仕えている人々は、貴方の怒りを恐れて、必要な経費について報告することを躊躇しています。これは良いことではありません。

この書簡によれば、Platon は祖国にあって、Dionysios のために代理人か仲介人のような役割を果たしてやっていたことになる。これは余りにも低俗な仕事だというわけで、事実としては否定され、この書簡も偽作とされたわけである。しかし O. Apelt などが主張するように、Dionysios を後援者として合唱団奉仕を引受けることは、アテナイでの Dionysios の名声を高めることになるから、両者の外交関係の親密化にも役立つ。かかる仲介者の役割は、Platon の如き名望家にして初めて果し得ることであったとも考えられる¹⁾。それゆえ必ずしも低級な仕事ではなかったのである。とにかく Platon は Dionysios から相当な金額を預っていたらしい。前述のように、80タラントンという金額を Platon は Dionysios から受取っていたという伝えがあるが (Diog. III, 9), それは恐らく、この預った金のことを指すのであろう。しかし、この金は手紙の文面によれば、預った金でありながら、多少は Platon のものでもあったようで、その境界が問題であった。Platon は自分に属すべき金として約16ムナを受取り (f), それで彫像などを買い、自分からの贈物として送っているのである (b)。要するに、Dionysios からの金は、一面では二人の共同の資金であるように考えられているが、しかし、そのうちの一定の部分は比較的自分自身に属すべきものと考えていたらしい (g)。しかし、そのような自分に属する部分についても、その用途については Dionysios に報告すべき義務を感じているのである。

さらに注目されるのは、死んだ姪たちの残した四人の娘たちの嫁入りの世話を、Platon が引受けている点である (h)。その娘たちの父親は生きているのに、Platon の方が裕福だという理由で、この負担が彼の肩にかかって来ているのである。そして、それがさらに Dionysios からの援助によって支払われる。友情という絆を通じて、富者から貧者へ金が流れてゆく仕組みになっているわけである。母の墓を建てる費用も、そして税金も Dionysios からの援助で支払われる (i, e)。Dion その他の親しい人々からも、程度の差はあれ、似たような援助を受け、同様の方式で使用していたことも知られる (g, h)。

ところで、このような僭主への経済的依存が、この書簡の偽作説の論拠ともなっている。アテナイ最高の名家に数えられる Platon 家が、姪の娘の嫁資に窮して他人に援助を求めるほど貧しかったのであろうか。また母の墓を建てる費用についても、Dionysios からの援助に頼ろうとしているが、しかし Platon の実母 Periktione は自分の叔父 Pylilampes (アテナイの有名な富裕者) と

1) Cf. O. Apelt, *Platons Briefe*, S. 146 f.

再婚してしまっていたのに、Platon が墓の費用を負担するのは不可解なことである。もっとも、この手紙の頃には Periktione は第二の夫とも死別していた可能性が強いので、Platon が世話していたものとも考えられる。しかし、それにしても Platon が墓の費用に困るほど貧乏であったとは考えられないのではないか。とにかく、この書簡の Platon は、あらゆる口実を設けて僭主から金銭を貰おうとしているかのようである。それゆえに、この書簡は悪意による偽作だとされるのである。

しかし Platon が師 Sokrates の生活態度を多少とも模倣して哲学に専念していたとすれば、戦中戦後の混乱を経たり、海外旅行に出たりしているうちに、財産を喪失したとしても不思議ではない。もちろん Sokrates ほどの赤貧ということはなかったであろうが、しかし Platon の生家が屈指の名家であっただけに、かえって苦勞が大きかったとも考えられる。この第13書簡には、かつて富裕であった名門の体面を何とかして維持しようという Platon の配慮があちこちに現れている。姪の娘の嫁資の準備とか、母の墓を建てる費用とか、税金とか。Platon が自分の家柄を誇りにしていたことは、対話篇にしばしば伯父・叔父・兄弟などを登場させていることから知られ、また『カルミデス』では、母方の家系が明らさまに讃美されている (Charm. 157 e~158 a)。しかし、そこから Platon 自身の時代にも一族が繁栄していたと想定するのは危険である。むしろ、すでに過去になった一族の栄光を回顧しているのだと考えられる。Burnet や Taylor が指摘したように、Platon の対話篇は、概して黄金時代のアテナイを描き出しているのであり、自分自身の時代のことは、ときどき犯す時代錯誤によって言及するだけである。この Platon の回顧趣味は自身の一族についても妥当する。

とにかく Platon には、このような名家の体面があったので、特別の出費が必要になったが、そのような点を除けば、Platon の生活態度は Sokrates のその継承であったと考えられる。即ち金銭と引換えに教育するということはせず、自らはただ研究や教育に専念し、生活費の不足分は友愛によって富者から援助して貰うのである。私たち現代人の眼には不思議に思われるが、Platon は Dionysios から提供された金銭を学問研究のためや学園経営のために使うとは言っていない。専ら自分の身内の特別な出費に当てているのである¹⁾。そこにあるのは友愛によって私生活が支えられているという原則である。Sokrates の場合には、この原則は主としてアテナイ市民同志の關係に限られていたが、Platon はこの友愛關係を異国の若い僭主にまで拡大したわけである。そして「友のものは共有」というピュタゴラス派の主義に基いていたらしく、Dionysios の財布と自分の財布とが、明確には区別がつけられないようになっていた。

しかし、この書簡で繰返し言われているように、Platon は可能な限り節約して、Dionysios な

1) なお付言すれば、当時のギリシアでは、学者に対する富裕者からの援助は、このような形で行なわれるのが、むしろ普通であったものとも考えられる。Eretria 学派の開祖 Menedemos (ca 350—276 B.C.) と、その親友 Asklepiades とに対する援助者 (οἱ σωματοποιήσαντες αὐτοῦς) は、Makedonia の Hipponikos と Lamia の Agetor であったが、後者は二人に対して 30 ムナずつ贈り、Hipponikos の方は Menedemos に、3人の娘たちの嫁資として (εἰς ἔκδοσιν τῶν θυγατέρων) 2000 ドラクメ 贈ったと伝えられる (Diog. II, 138)。

どに余計な負担をかけないように努力していた (g, j)。それゆえ自分の財産を太らせたりはしなかったはずである。晩年の Platon がどの程度の財産を持っていたかということは、その遺言状から微細な点まで知ることができる。それによれば、Iphistidai という所に土地があり、これは売却を禁じて、少年 Adeimantos に遺贈している。これは明らかに彼の相続財産であったと考えられるが、そのほかに彼が Kallimachos から買った土地があった。こちらの方は誰に贈るのか指定されていない。次に動産としては、銀 3 ムナ、重さ 165 ドラクメの銀の容器、重さ 45 ドラクメの盃。金の指環と金の耳環があり、両方で重さが 4 ドラクメと 3 オボロス。石工 Eukleides に 3 ムナの貸しがあり、自分は誰にも負債はない。そのほかに家具があるが、その目録は別に記してあるという。女の奴隷が一人いるが、主人の死後には解放すべきこと。そして男の奴隷が四人いる。以上が Platon の全財産である (Diog. III, 41~43)。

この遺言状は非常に微細な点まで財産を明記しており、経済生活の面での細心さは、上述の書簡とも共通の性格を示している。次に述べる Aristoteles の財産に比較すれば、Platon のそれは遙かに貧弱であった¹⁾。例えば彼に息子がいたとして、Isokrates の学校へ入れるために、授業料 10 ムナを支払うのも困難であった。従って誰か友人から用立てて貰うことになったであろう。前述の書簡で、姪の娘の嫁資 30 ムナや母の墓のための 10 ムナを出して貰おうとしたのも、このような Platon の資産の規模と適合している²⁾。

Platon の普通の収入源は、恐らく果樹栽培にあったものと想像される。彼の家で少なくとも無花果とミルテを栽培していたことは、上述の書簡からも知られ (d)，さらに葡萄を栽培していた可能性がある (c)。また前述のように、Platon がエジプトでオリーブ貿易に従事したという伝説があり (Plut. Solon II)，さらに彼は贅沢なものは食わず、オリーブばかり食べていたという逸話もある (Diog. VI, 25)。Platon とオリーブはこのように密接な関係があった。恐らく、これが彼の農地の主たる作物であり、あの四人の奴隷たちは、その果樹園で働くことになっていたものと想像される。このように Platon は果樹園経営によって、日常の普通の生活は営むことができたのであろうが、海外旅行とか冠婚葬祭とかの特別な出費には困って、Dionysios や Dion の援助に頼ったものと考えられる。

1) Ulrich von Wilamowitz-Moellendorf は *Antigonos von Karystos*, 1881, S. 280 において、この遺言状を次のように解釈している。即ち、Platon は自分の財産を学園に寄付してしまったのであり、自分の手許に残したものを遺言状に記しているのだと。しかし Platon がもともと裕福であったという彼の先入観には根拠がない。もちろん Wilamowitz は、第 13 書簡を偽作と考える。

2) 紀元前 4 世紀アテナイの法廷弁論から知られる富裕市民の場合には、嫁資の額は 1~2 タラントン程度が普通であり、Platon の姪の娘の場合の 2 倍から数倍に相当する。伊藤貞夫氏によれば、嫁資の額は設定者の財産総額との比率から見て、それが単なる贈物ではなく、財産分与としての性格をもつものであったらしい (『講座・家族』第一巻, 1973 年, 弘文堂, pp. 139 f.)。

なお Platon は『法律』において、嫁資については最富裕階級の場合でも 2 ムナ (774 d)、墓の費用については最高 5 ムナと制限している (959 d)。第 13 書簡の金額 (それぞれ 30 ムナと 10 ムナ) は、この理想案を大きく超過している。この相違は、この書簡を偽作とする説の一つの根拠とされる点であるが、しかし社会の状況が現状のままでは、嫁資や葬祭費だけを下げても余り意味がない。とりわけ嫁資の方が大幅に超過しているのは、現状の社会にあって花嫁の立場を安定させてやるためであったろう。

もちろんアカデメイアでは Platon は学生から授業料を取らなかった (Diog. IV, 2)。Dion のように財力のある弟子たちは、自発的に Platon を援助したのであるが、これは Platon の私生活を支えるためのものであった。しかし Platon の研究と教育の活動には、あまり資金は必要でなかったろう。もちろん学生の生活費は少なくとも自弁であったし、Platon の学風は理論的考察が主であったから、Aristoteles の場合とは異なって、資料や図書を蒐集する必要も大きはなかったはずである。Wilamowitz は、Platon の学園には博物標本室や図書館があり、さらに出版事業も行なわれていたと主張しているが、これは非常に間接的な証拠からの推論に過ぎない¹⁾。この学園に、それほど設備があったとは考えられない。研究や教育活動は gymnasion の公共施設を利用して行なわれていたのであり、それゆえ部外者でも Platon の教育活動の状況を垣間見ることができたのである。紀元前4世紀中頃の喜劇詩人 Epikrates の断片では、Platon や Speusippos が学生に、動植物の定義や分類を勉強させているのを部外者が眺めて批評する場面が描かれている (Athen. II, 59 d~f.)。なお、後段で引用する Platon と Aristoteles との仲違いに関する逸話 (Ael. Var. Hist. III, 19) から、アカデメイア学園の施設の状況が多少は明らかになる。

Platon の死後、アカデメイアの学頭 (σχολάρχης) になったのは、甥の SPEUSIPPOS であった。彼は8年間この地位にあり、Platon の学説を忠実に継承したけれども、性格の面では怒り易く、快楽に耽り勝ちであった。しかも Platon は授業料を取らなかったのに、Speusippos はそれを要求したと伝えられる (Diog. IV, 1~2)。しかし別伝によれば、彼はむしろ立派な人物であったことになる。彼は亡命中の Dion と親しく交わったが、それは彼の趣味や教養によって Dion に良い感化を及ぼすように、Platon が取計らったことであった。そして Dion は自分がアテナイで悠々自適のために買入れて住んだ地所を、シケリアへ帰還するに際して、Speusippos に贈ったという (Plut. Dion, XVII)。アテナイでは異国人は不動産を取得できないはずであるのに、ここで Dion が取得しているのは不可解なことだとも思われるが、Dion が Platon を通じて合唱団奉仕などを引受けているため (Plut. *ibid.*)、特別に許可されたのだとも考えられよう。

次の学頭 XENOKRATES は Chalkedon 出身で、古くからの Platon の弟子であり、威厳のある (σεμνός) 人物であった (Diog. IV, 6)。当時の有名な遊女 Phryne や Lais の誘惑にも屈しなかったとか (Diog. IV, 7)、極めて自足的 (αὐταρκέστατος) な人間であって、Alexandros 大王から贈られた大金のうち3000ドラクメ (Attikai drachmai) だけ受取って、余りは返したし、また Antipatros からの贈物は受取ろうとしなかったと伝えられている (Diog. IV, 8)。なお別伝によれば、Alexandros 大王は Xenokrates に50タラント贈ったと言われており (Plut. Alex. VIII, 5)、これが上記の大金の額かも知れない²⁾。とにかく Xenokrates はアテナイ市民の間で人望があつたらしく、在留外人でありながら、アテナイから Philippos のもとへ他の人々とともに

1) U. von Wilamowitz-Moellendorf, op. cit. S. 284~286.

2) Cf. J. R. Hamilton, *Plutarch Alexander. A Commentary*, 1969, ad loc.

使節として派遣されたこともある。そして彼だけが買収されなかったと伝えられる (Diog. IV, 9)。このような人物であったけれども、在留外人税 (μετοίκιον), 即ち成人男子ひとりだけとすれば、年額12ドラクメを支払えなかったために、アテナイ人は彼を売却しようとしたことがあり、かの Phaleron の Demetrios が彼を買い戻して救ってくれたという (Diog. IV, 14)。しかし別伝によれば、徴税請負人 (τελώνης) が在留外人税を支払わせるために彼を捕えようとしていたときに、たまたま有名な政治家 Lykurgos が来あわせて、杖で税吏を打って、Xenokrates を解放したのだという (Pseudo-Plut. Vit. dec. orat. 842 b)。それゆえ、この事件の細部については問題があるが、とにかく彼は12ドラクメを支払うのも困難なほどの清貧の生活を送っていたのである。

Xenokrates の死後、アカデメイアの学頭になった POLEMON は、アテナイ出身であり、その父 Philostratos は非常に富裕で、戦車競走用の馬を飼っていた (Diog. IV, 17)。幼少の頃の Polemon は、いつも銭を持ち歩いて欲望を充たしていた。そしてアカデメイア入学後も、飲み歩いたりしていたが、やがて Xenokrates の感化により、一転して最も勤勉な学徒となり、自ら師の後継者ともなったのである (Diog. IV, 16)。さらにアテナイ市民の間でも尊敬されたけれども、アカデメイアの庭園 (ἡ κήπος) に籠って静かに研究に耽り、その近くに弟子たちが小屋を作って住んだと伝えられる (Diog. IV, 19)。

Polemon の次に学頭となった KRATES も、やはりアテナイ人であったが、一つ家で師と共同の生活を営み、次第に同化され、死後も師と同一の墓に葬られたという (Diog. IV, 21)。

このようにしてアカデメイアは、生活様式をも同化する文字どおりの共同体であった。従って、この学園に入学し、そして研究を続けてゆくためには、狭義での師の学説を受容するか否かということよりも、むしろ学園の特殊な生活上の流儀に親しめるか否かということの方が、問題であったに相違ないのである。そして、その生活様式は、経済的には質素な清貧の生活であったから、この学園には貧しい家の子弟も入学する可能性があったと思われる。紀元前4世紀後半のことであるが、Eretria の Menedemos と Phleius の Asklepiades は、アテナイ滞在中に Areopagos 会議へ呼び出され、「財産もないのに、このように肉体は健康で、毎日、哲学者たちと学校で時を過しているのは、如何にしてか」と審問された。そこで両人は、一人の製粉屋を呼び出して貰った。この粉屋は、両人が毎夜、自分のところへ働きに来ては2ドラクメ受取っていると証言したので、Areopagos 議員たちは感心して、彼らに200ドラクメを贈ったという (Athen. IV, 168 a~b)。この両人は昼間は学校へゆき、夜は肉体労働にゆくという苦学生の生活を送っていたわけであるが、この学校というのは明らかにアカデメイアを指している (cf. Diog. II, 125)。

もちろんアカデメイアには比較的富裕な弟子も入学して来た。Soloi 出身の KRANTOR (ca 335—ca 275 B.C.) は、祖国で有名になっていたにもかかわらず、アテナイへ来て Xenokrates の弟子となり、Polemon の親友となったが、かなり富裕であったらしく、自分を慕って来た Arkesilaos に、12タラントに相当する財産を遺贈している (Diog. IV, 24 f.)。

この ARKESILAOS (ca 315—240 B.C.) は、Aiolis の Pitane 出身であるが、Krates の死後、アカデメイアの学頭となり、懐疑主義の立場を強めて、中期アカデメイアを開いた人物である

(Diog. IV, 28)。その生家は相当な資産家であつたらしく、父の死後も長兄の後見のもとに、あちこちで師について学び、最後にアテナイへ来て、初め Theophrastos の弟子になったが、やがて Krantor の下へ移ってアカデメイアの人となった (Diog. IV, 29 f.)。彼は非常に金まわりが良かったようである。祖国 Pitane には自分の財産があつて、そこから兄弟の一人 Pylades が送金してくれていたし、さらに Eumenes 王が彼に多額の資金を提供してくれていた (Diog. IV, 38)。それゆえ諸王のうち、この王にだけ著書を献上したという。さらに前述のように、師の Krantor から12タラントンの財産を贈られもした。このように金持ちであつたが、金銭には非常に大様であつて、困っている友人などに密かに金を贈ったりするのを好んだ (Diog. IV, 37 f.)。しかし、その生活は奔放であつた。Theodote および Phila という二人の遊女と公然と同棲し、生涯を通じて妻も子もなかったという (Diog. IV, 40; 43)。

しかし、この Arkesilaos の死後アカデメイアの学頭となった Kyrene 出身の LAKYDES (206/5 B.C. 死亡) は、非常に威厳のある人物 (ἀνὴρ σεμνότατος) であり、若い頃から勤勉で、貧乏 (πένης) ではあつたけれども、上品 (εὐχαρις) で社交的 (εὐόμιλος) であつたというが、さらに彼の家政 (οἰκονομία) について面白い話が伝えられている。即ち、彼が貯蔵室から何かを持ち出した場合には、誰かが勝手に持って行くのを防ぐために、入口の戸に封印までしたものであるが、召使いたちはそれに気づいて、好きな物を持ち出しては、同じように封印をしておいた。ところが、Lakydes 自身は、それに全く気づかなかつたというのである (Diog. IV, 59)。このように彼は経済問題について細心であつたにもかかわらず、どこか抜けていたわけである。なお、当時の学者がこのように直接的に家政に関心を持っていたことに注目する必要がある。

この Lakydes がアカデメイアの学頭るとき、Pergamon の君主 Attalos 1世が庭園 (κῆπος) を設けてくれたので、彼はその庭園で授業したという。そして、その庭園は彼の名に因んで、Lakydeion と呼ばれることになった。彼は在世中に Phokaia の Telekles と Euandros とに学園を委ね、そして、この Euandros の次に学頭になったのが、Kyrene 出身の KARNEADES (214/13—129/28 B.C.) である (Diog. IV, 60)。この Karneades はこれまでの懐疑主義を新しく展開させた人であり、後期アカデメイアの開祖とされる。しかし学園の設備の面では、この頃になつてもアカデメイアは独自の設備を確保していたわけではなかつた。彼の講義は非常に有名になつて、他の学派からも多くの聴講者を集めていたが、講義をする彼の声が非常に大きかつたので、体育場の長官 (γυμνασίαρχος) が使者をやって、そんなに大きな声で叫ばないで欲しいと要求したほどであつたという (Diog. IV, 63)。この学園では、あまりに大きな声で講義すると、一般の体育場利用者には迷惑であつたらしい。それゆえ明らかに、当時でも、この学園はあくまでも公共施設の中に、それに寄生して存在していたのである。

なお、この Karneades は、アテナイから派遣されてローマへ赴いたことがあり (156/55 B.C.)、その地でおこなつた講演は非常に有名になつた (Plut. Cat. Mai. XXII)。彼の弟子で、学頭職の後継者となつた KLEITOMACHOS は、本名を Hasdrubal と称し、カルタゴ出身であつた (Diog. IV, 67)。

Platon から Krates まで前期アカデメイアでは、5代の学頭のうち Xenokrates を除いては、すべてアテナイ出身者であった。ところが Arkesilaos 以下の中期および後期の学頭は、すべて異国出身者になってしまう。次に述べる Lykeion 学園では最初から異国出身者が学頭職を独占しているが、アカデメイアでは途中から変化が起るのである。中期および後期のアカデメイアでは懐疑主義の傾向が強まって、学説の面で変化が起ったわけであるが、恐らく学園における生活の面でも相当な変化が生じたものと推測されよう。

第八章 アリストテレスとリュケイオン学園

ARISTOTELES (384—322 B.C.) の父 Nikomachos は、Stageira の人で、父祖以来の医師であったが、Makedonia 王 Amyntas の侍医兼友人として一緒に（王宮または近辺）に住んでいたという (Diog. V, 1)。恐らく名医という評判を得ていたのであろう。かかる立場にある医師が非常に裕福になるのは当然のことであった。少し時代は遡るけれども、似た例として Kroton 出身の医者 Demokedes の場合がある。彼は頑固な父を嫌って Aigina へ移住するが、そこで開業して2年目には、他の医者をしてのいで名声を博する。そして Aigina 人は彼に国費から1タラントン支払うことにして、公共の医師として登用した。しかし、その翌年にはアテナイ人が100ムナ即ち1タラントンと40ムナで彼を迎え、さらに翌年には Samos の僭主 Polykrates が2タラントンで抱えた¹⁾。そこで戦乱に巻き込まれ、奴隷として小アジアへ連れ去られるが、その技術を見出されて Dareios 王の侍医となり、王の陪食役ともなって、Susa に豪壮な邸宅を構えることになった (Hdt. III, 129~132)。もちろん Demokedes の栄達は異例のものであったからこそ、このように詳細な記録が伝えられたのであろう。また同じく王の友人兼侍医になったとしても、ペルシア王とマケドニア王とでは財力に大きな差がある。しかし、とにかく Nikomachos は父祖以来の家業を継ぎ、さらに王家の侍医ともなったので、相当な資産を蓄えていたものと考えられる。

Aristoteles は17歳でアカデメイアに入学し、Platon の死の年 (348/7年) まで20年間も、そこで勉学や研究を続けることができたから (Diog. V, 9)、そのこと自体が生家の資産を示している。ただし、Aristoteles はその生家の資産を蕩尽したのだという伝えもある。即ち、「Aristoteles は父からの財産を蕩尽して (*ἀσωτευσάμενος τὰ ἐκ τοῦ πατρὸς χρήματα*)、遠征に参加し、そこから難儀して脱出して薬屋 (*φαρμακοπώλης*) となった」ことがあり、Peripatos で偶然に論議を聴いて (*παρακούων τῶν λόγων*)、学問することになったのだという (Ael. Var. Hist. V, 9)。しかし、この伝説は、後世になって一般人の通念において哲学と貧困とが不可分のものとなってから作られたものであろう。前述のように、Aelianus は Platon についても、貧乏して出征したことがあるという伝説を述べていた。両者は同一の背景から生み出されたものであろう。証拠の大勢が

1) H. Stein は Herodotos への注釈で、これら三つの金額はいずれも Aigina 系タラントンで示されていると想定する。その場合には、Solon 以来アテナイで標準となった Euboa 系のものとの比率は、11対8である。ただし、A. H. Sayce や How and Wells の注釈では、特に説明されていない。

ら判断すれば、Aristoteles は生家の資産を継承して、終始、豊かであったと考えられる。

さて Platon の死後、Aristoteles はアカデメイア出身の Hermeias (Atarneus の僭主) に招かれて、小アジアへ渡り、Assos で研究を続け、Hermeias の姪 Pythias を婚る。345年に Hermeias が殺されると、Mytilene へ移り、343/2年には Makedonia の Philippos に招かれて、王子 Alexandros の家庭教師になる (Diog. V, 9~10)。Plutarchos (*Alex.* VII, 2) によれば、Philippos は「哲学者の中でも最も名声が高く、最も学識に富む (*ἐνδοξότατον και λογιώτατον*) Aristoteles を招いて、これに相応しい立派な報酬を払うことにした」のだという。W. Jaeger など現代の学者たちの間では、Aristoteles が当時すでに、これほど有名になっていたとは考えられないとして、Aristoteles が選ばれたのは、主として Makedonia と Hermeias との政治的な関係によるとする説が有力である¹⁾。しかし父の代からの関係もあったから、Platon 門下の俊秀としての Aristoteles の名声は、少なくとも Makedonia の宮廷へは届いていたはずである。それゆえ家庭教師として相当な報酬を受けていたことを信じてよかろう。さらに Philippos 王が Aristoteles の研究活動を経済的に援助したという伝えもある。この王は学問 (paideia) にも理解があつて、「Aristoteles に十分な財産を提供して、多くの部門での豊富な学識とりわけ動物に関する知識を得させる恩人となった。Nikomachos の息子 (Aristoteles) は、Philippos からの財産 (*περιουσία*) によって、動物誌を完成したのである。彼 (Philippos) は Platon および Theophrastos をも尊重した」という (Ael. *Var. Hist.* IV, 19)。Philippos が Aristoteles の実証的研究態度を本当に理解して、その資金を援助したなどとは考えられないが、とにかく Aristoteles の学風は、このような経済的な基盤に支えられていたようである。

335年に Philippos が暗殺されて、Alexandros が王位に即くと、Aristoteles はアテナイへ戻り、やがて Lykeion 体育場の施設 Peripatos で学園を開くことになる。彼は実証的研究を重んじたから、ここで図書や資料を蒐集したらしい。そのための費用は Alexandros から受取ったという伝えがある。「この Stageiros 人 (Aristoteles) は動物に関する研究のために、Alexandros から800タラントンを受取ったと伝えられている」ということである (Athen. IX, 398 e)。この800タラントンという額は、この論文の扱う範囲では、学者が王や国家から贈られたものとして最高の金額である。323年に Alexandros が死ぬと、アテナイでは反マケドニアの動きが活発となり、Aristoteles も瀆神罪の名目で訴えられ、Chalkis へ逃れて、そこで死亡する。

このように転変の多い生涯を送ったにもかかわらず、Aristoteles は最後まで裕福であった。そのことは遺言状から明らかである。ただし、そこでは Platon の遺言状のようには物件が明記されていない。その代りに妻や子供たちや奴隷たちへの配慮が細心に述べられている。そのうち経済的な配慮だけを次に取出して見よう。まず後妻 (内縁関係らしいが) の Herpyllis には、生前に与えたもののほかに、銀1タラントンと3人の召使いを与えている。そして男女の奴隷たちにまで、500ドラクメとか1000ドラクメとかの金銭を与え、しかも老後の世話をする奴隷をつけて解放して

1) W. Jaeger, *Aristotle*, 1934, p. 120. Cf. J. R. Hamilton, *op. cit.* ad VII, 2.

やっている。父から相続した家が Stageira にあり、ほかに Chalkis にも家がある。Herpyllis は誰かと再婚しない場合には、そのうち好きな方の家に、十分な家具を整えて貰って住むこと。死亡した親族の者たち5名の像を建て、さらに神々への奉納像を建てることをも指示している。それらの費用だけでも相当の額であるが、その程度の資金はいくらでも準備されているような調子で、この遺言は書かれている (Diog. V, 11~16)。このように彼は終生、経済的に恵まれていたわけであり、その条件を生かして、あの実証的な学風を確立したのである。しかし、その資産の多くがマケドニア王家との特別な関係に由来していたことも重要な事実である。Alexandria の王立研究所への道は、ここに既に準備されていたとも言えよう。

ところで、Aristoteles が新しい学園を開いたことについては、アカデメイアへの反目や対抗意識があったかの如くに伝えられている。この分裂の契機はすでに Platon の在世当時に生じていたという伝えもある。それによれば、Aristoteles は師の生きているうちにアカデメイアから離脱したのであり、Platon は「仔鹿が自分を生んだ母親を蹴るように、Aristoteles は私を蹴る」と語っていたという (Diog. V, 2)。また自分ではなく、学友の Speusippos や Xenokrates が次々に学頭に選ばれたことに対する不満があったとも伝えられる (Diog. V, 2~3)。さらには Platon の死後、アカデメイア内部に生じた複雑な人間関係を通じて、学問上の立場の相違が明らかになったことも原因として指摘されている。しかし両学園の分立には、経済的な問題についての流儀の相違もかなり関係していたのではないと思われる。Aristoteles は Platon の一種の共産主義に反対し、私有制を良しとしたが、その理由は、財産を私有にしておいた方が管理が立派になされるからであり、その上で利用については「友人のものは共有」にすれば良いというのであった (*Politica*, 1263 a)。それに対して Platon の考えでは、少なくとも政治担当者にとっては、財産は共有にして、それへの配慮から解放されることが望ましかったのである (*Resp.* 465 b~c)。ところが Aristoteles にとっては、ある程度の財産は、立派な生活を送るための不可欠の条件であった。彼の倫理学においては、経済的な面での適度の大様さ (*ἐλευθεριότης*) が非常に重視され、これは主として人に与えることにあるのである (*Eth. Nic.* IV, 1)。有徳であるためには財産がなければならなかった。このように経済問題について両者の考えに根本的な相違があったとすれば、同一の学園での共同生活は困難であったはずである。当時の学園の成員は近くに住んで、しばしば共同食事をおこなうことになっていたからである。

Platon のアカデメイアにおける共同食事は、もちろん質素なものであったらしい。アテナイの有名な将軍 Timotheos (Konon の子) は、あるとき Platon に招かれて、アカデメイアの symposion に参加し、質素ながらも優雅に歓待された (*ἐστιασθεὶς ἀφελῶς ἄμα καὶ μουσικῶς*) という。その後で Timotheos は贅沢な食事を非難し、逆に「Platon のところでは、今日のためよりも明日のために食事する」と言って讃えたということである (*Ael. Var. Hist.* II, 18)。

ところが、Aristoteles は、哲学者としては贅沢好みであったらしく、そのために Platon との間に仲違いが起こったのだという伝説がある。

Platon と Aristoteles との仲違いは、もともと次のようなことから起こったのだと言われている。Platon にとっては、Aristoteles の生活ぶりも身につけているものも気に入らなかった。というのも、Aristoteles の着物や靴は精巧に作られたものであり、頭の刈込みのところを剃っていたが、これも Platon には異様な感じであった。そして指環をいくつも嵌めて、それを自慢にしていた。さらに彼の顔には嘲笑の色 (*μωκία τις*) が現れていたし、また不適切な時に無駄話する口数の多さ (*στωμυλία*) も彼の性向を物語っていた。明らかに万事につけて、あの哲学者 (Platon) とは異質であった。これを見て Platon は彼を自分に近づけようとせず、むしろ Xenokrates や Speusippos や Amyklas などの方を大切に扱い、言葉を交わしたり、また他の点でも、彼らの方を尊重して歓迎したのであった。あるとき Xenokrates が祖国へ帰省したとき、Aristoteles は Phokis 人 Mnason の如き人々を主とする自分の仲間の一団を身のまわりに従えて、Platon を攻撃したのであった。その頃、Speusippos は病気をしており、そのために Platon に付き従うことができなかったのである。Platon は80歳になっていて、高齢のために記憶が薄れていた。さて Aristoteles は彼を襲い陰謀をたくらんで、全く名誉心から難詰する調子で質問をおこなった。これが不当かつ不明の行為であることは明らかであった。かくして Platon は外部の歩廊 (*τοῦ ἔξω περιπάτου*) から離れて、仲間とともに自宅で逍遙することにした (*ἐνδον ἐβάδιζε*)。

三月たって、Xenokrates が旅行から帰って見ると、もと Platon が居た場所に Aristoteles が濶歩していた。そして彼 (Aristoteles) が友人たちとともに Platon の所へは行かずに、自分勝手に町へ去ってゆくのを見て、歩廊 (Peripatos) の中にいた一人の男に、一体 Platon はどこにおいでなのかと尋ねた。というのも、彼が病気になっているのではないかと思ったからである。すると、この人は「Platon は病気ではありません。Aristoteles が彼を悩ませて、歩廊から立ちのかせたので、自分の庭園に退いて哲学に耽っておいでです」と答えた。それを聞いて Xenokrates は直ちに Platon の所へ行って見ると、彼は自分とともに居る人々と対話していた。その人々は数も非常に多く、また語るに足る人々であって、若者のうちで最も傑出した人たちであった。そこで会話を中止して、当然のことながら彼 (Platon) は親しく Xenokrates を迎え、また Xenokrates の方も同じように親しく挨拶した。そして会合が解散すると、Xenokrates は Platon に話しかけたり聞いたりせずに、Speusippos のために仲間を集めて、歩廊から退こうとしていた Aristoteles を激しく非難した。そして自ら Stageira 人 (Aristoteles) を強烈に攻撃し、大変に名誉心を発揮したので、彼を追い出して、Platon に使い慣れている場所 (*τὸ σύνηθες χωρίον*) を返してやることになった。(Ael. Var. Hist. III, 19)。

このように子供じみた学園紛争が、Platon と Aristoteles との間で起こったとは、もちろん考えられない。また、かかる末梢的な服装とか態度とかの問題だけで、この両哲学者の間に感情的な対立が生じたとも考えられない。しかし、このような逸話が作り出された背後には、やはり物質生

活の面での、両哲学者の流儀の相違があったものと想定され、少なくとも、その点だけは事実であったと考えるべきであろう。(なお、この逸話の全文を長々と引用したのは、この事件の舞台であるアカデメイア学園の施設を垣間見ることができるからでもある。Platon が使い慣れていた教場 *περίπατος* は公共建築物であつたらしく、そこは別人が占居することも出来たのである。それとは別に Platon の私有の庭園 *κῆπος* があって、そこへ仲間とともに退去することもあったわけである。)

さて、このように Platon と Aristoteles との間に物質生活の面で流儀の相違があったとすれば、当時の学園は生活共同体であつたから、この相違が両学園の雰囲気の違いを生み出したことであろう。前述のように、アカデメイアには Eretria 出身の Menedemos と Phleius 出身の Asklepiades のような苦学生も入学していたが、リュケイオン学園の場合には、そのような苦学生の実例が見あたらないようである¹⁾。次に述べるように、第二代目の学頭 Theophrastos も裕福であるし、第三代目の Straton も貧しかったとは思えない (Diog. V, 58~64)。第四代目の学頭 Lykon は、Karystos の Antigonos によれば、とりわけ派手好みであつて、知人を招待しては贅沢に饗応したという。学園の月当番は各生徒から毎月 9 オボロスずつ徴収して、これら会費納入者ばかりでなく、学頭の招待客をも派手に饗応し、また Musai への供物も捧げなければならなかつた。そのため多くの人々がかかるとの出費を恐れて、この学園への参加を断念したが、Platon や Speusippos の Akademeia には、このような事情はなかつたと伝えられている (Athen. XII, 547 d~548 b)。この Lykon について、さらに Hermippos によれば、その服装は極めて清潔で、その生地は最も柔らかな上質のものであつたという (Diog. V, 67)。前述の逸話に見られる Aristoteles に似て、Lykon も服装には贅沢な趣味があつたらしい。また Aristoteles の弟子のうち Theophrastos と並んで豊かな業績を残した Pontos 地方の Herakleia 出身の Herakleides は、金持ち (*ἀνὴρ πλούσιος*) だと明言されている。アテナイで最初は Speusippos の弟子となつたが、やがて Aristoteles の門へ転じた人物である。彼も柔らかい上質の服を着ていたという (Diog. V, 86)。それゆえリュケイオンの学者たちは、後述する犬儒派やストア派の哲学者とは外見からして対照的であり、恐らくはアカデメイアの哲学者たちとも多少の相違があつたものと思われる。ただしアカデメイア派の贅沢を語る史料も皆無ではない。喜劇詩人 Ephippos は、Platon やその門人の贅沢な服装や髪型などを揶揄している (Athen. XI, 509 b~e)。しかし証拠の大勢に従つて上記のように判断しても大過あるまい²⁾。

1) Diogenes Laertios がアカデメイア派に分類している Bion は、Theophrastos の講義を聴いたこともある (Diog. IV, 52)。彼の父は Borysthenes で塩魚貿易を営む解放奴隷であり、母はもと売春婦であつた。しかも一家をあげて奴隷に売られたことがある。そのとき Bion も売られたが、主人の死後に解放され、遺産を相続したという (Diog. IV, 46 f.)。この人物は出自は下賤であるが、財産はあつたものと思われる。本論文87頁の注1を参照。

2) 古来、哲学者のうちには贅沢な服装を好んだものがあり、それが人目を引いて語り伝えられていた。Pythagoras は白い服をまとい、黄金の冠をつけ、東洋風のズボンをはいていたし、Empedokles は本物の紫貝で染めた着物をまとして、青銅の靴をはき、Hippias と Gorgias も紫染めの服を着ていたという (Ael. Var. Hist. XII, 32)。

さて、Aristoteles が Chalkis へ去ったとき (323/22 B.C.)、リュケイオンの学頭の地位を継承したのは、THEOPHRASTOS (372/369—288/285 B.C.) であった。彼は Lesbos 島 Eresos の出身で、父 Melantes は晒屋 (*κναφεύς*) であったと伝えられる (Diog. V, 36)。もちろん、この仕事そのものは高貴なものとは考えられぬが、しかし奴隷を使って、かなり大規模に営業していたのであろう¹⁾。とにかく相当な資産家であったと想定しなくては、息子 Theophrastos の経歴は理解できなくなる。Theophrastos は最初、Eresos の Alkippos の弟子となったが、やがてアテナイへ赴いて、Platon の弟子となり、さらに同門の先輩 Aristoteles の弟子、そして後継者となった (Diog. V, 36)。もちろん Aristoteles と同様に、彼も在留外人としてアテナイに滞在していたのであるが、アテナイ人の中での人気は非常に良かったようである。各地から多くの弟子が集まったらしく、2000人もの弟子が聴講したと伝えられる。そして Agonides なる人物が彼を瀆神罪 (*ἀσεβεία*) のかどで訴えたときには、この告訴者の方がもう少しのところで罰せられるところであったという (Diog. V, 37)。また Sophokles なる人物が、何人も評議会および民会の承認なしには、学園を開いてはならず、これに違反すれば死刑に処するという法律を制定させたことがあった。このため彼も他の哲学者たちとともに、一時は国外へ退去したことがあるが、翌年には、この法律は廃止され、提案者 Sophokles は違法な提案をしたとの理由で、5 タラントンの罰金を科された。それというのも、アテナイ人が Theophrastos の帰還を願っていたからだという (Diog. V, 38)。そして学友の Phaleron の Demetrios の尽力により、Theophrastos はアテナイで自分の庭園 (*ἴδιος κήπος*) を入手することができた (Diog. V, 39)。Aristoteles も Theophrastos も在留外人であるから、本来アテナイで土地を所有することができなかったのであるが、学友がアテナイの支配者になったおかげで、ここにペリパトス学派の根拠地ができたわけである。この学派は実証的な研究を特長としていたから、図書や資料の保存のための確たる場所が定まったことは、非常に重要な意味をもつ。

ところで、このようにして得られた学園の施設は、Theophrastos 個人の所有物であった。そのことは彼の遺言状から明らかであり、彼が相当に裕福であったことも明らかである。遺言状では、冒頭の挨拶の言葉に続いて、まず次のように述べられている。

家にある財産はすべて (*τὰ μὲν οἴκοι ὑπάρχοντα πάντα*) Leon の息子たち、即ち Melantes と Pankreon とに与える。Hipparchos のもとにある積立金の中から (*ἀπὸ δὲ τῶν παρ' Ἰππάρχου συμβεβλημένων*)、以下のことが為されるように、私は希望する (Diog. V, 51)。この文面によれば、故郷 Eresos に資産があったが、Theophrastos には妻子がなかったらしく、これを全部 Leon 息子たち (恐らく Theophrastos の甥に当るのであろう) に遺贈しているわけである。これは彼の純粋に個人的な財産であったが、これとは別に学園を運営するための資金があり、これを Hipparchos という人物が管理していたらしい。その積立金によって為すように指示

1) ギリシア人の生活にとっては、晒屋は不可欠のものであったらしい。Theophrastos 自身も、この職業にしばしば言及している (*Char. X, 14; XVIII, 6; XXII, 8*)。その他、*Hdt. IV, 14; Aristoph. Vesp. 1128; Eccl. 415* など。

されているのは、次のようなことである。(1) Museion および女神たちの像の修復。(2) Aristoteles の肖像を神社に納めること。(3) Museion に接続した小柱廊 (τὸ σταυρίδιον) を再建すること。(4) 下の方の柱廊に世界地図 (αἱ τῆς γῆς περίοδοι) を描いた板を陳列すること。(5) 祭壇の修復。(6) Nikomachos の等身像を完成すること。その彫刻そのものの代金は Praxiteles に支払ってあるが、それ以外の費用は、この積立金から支払うこと。——以上が学園の施設についての指示であり、全部で相当な金額になるはずである。肖像を当時の最も有名な彫刻家 Praxiteles に注文して、すでに代金は支払い済みだと述べているが、この代金も相当なものであったろう。リュケイオンは、Theophrastos の時代には、外観的にも立派な設備を誇るようになっていたのである。さらに遺言状は別の個人的な財産(地所)について述べながら、ただちに続けて学園の研究設備に話題を移している。

Stageira にある私の地所 (τὸ δὲ χωρίον τὸ ἐν Σταγείροις ἡμῖν ὑπάρχον) を、私は Kallinos に与え、書物はすべて Neleus に与える¹⁾。庭園と歩廊および庭園に接する家屋は、次に記す友人たちのうち、ここで一緒に研究し哲学したいと欲する人々に与える。というのは、全員が常に滞在することは不可能だからである。ただし、決して売却したり、何人も私用に用いたりせず、神社のように共同で所有し、妥当かつ正当であるように、相互に親しく友情をもって使用すること (Diog. V, 52 f.)。

これに続いて、学園施設の共同所有者となる10人の名前が列挙され、さらに Metrodoros の息子の Aristoteles への配慮、奴隷たちの処遇などが述べられている。それによれば、学園の管理人になっている解放奴隷が男女一名ずつ存在したほかに、小間使 (παιδίσκη) が一人、男の奴隷が8人いたことが知られる。これらの奴隷は、Theophrastos 個人の身のまわりの世話をしたり、また主として学園の仕事をするものであったりして、その間の区別が不明確であったようである。すでに見たように、学園の土地や家屋も、法的には Theophrastos 個人の所有であったが、その利用については、前述の Aristoteles 以来の「友人のものは共有」という原則によって、この学園は運営されていたのであろう。そして Theophrastos は死に臨んで、この原則をさらに実質化して、法的にも10人の研究者の共有ということにしようとしたわけである。しかし学園内の重要な動産である蔵書については、これを全部 Neleus に遺贈した。ところが、Theophrastos の死後、第三代目の学頭に出されたのは、Neleus ではなく、Lampsakos 出身の Straton であった。Neleus は遺贈された蔵書を持って、故郷の Skepsis へ帰ってしまった。しかも、この蔵書は、Aristoteles 以来の蔵書を含んでいたから、この学園は重大な難局を迎えることになる。Strabon によれば、

この Skepsis からは Sokrates 派の Erastos と Koriskos が出ているが、この Koriskos の息子が Neleus で、この人物は Aristoteles および Theophrastos の弟子であって、

1) 前述のように、Aristoteles は故郷 Stageira と Chalkis と両方に家を持っていたが、そのうち Stageira の家は Theophrastos の手に帰っていたのであろうか。彼は Aristoteles の蔵書をも継承していた。

Theophrastos の蔵書を相続したが、この中には Aristoteles のものも含まれていた。とにかく Aristoteles は学校を遺贈した Theophrastos に、自分の蔵書をも贈与したのであった。彼は、吾々の知る限りでは、最初に図書を蒐集し、エジプトの王たちに蔵書の整理方法を教えた人物である。そして Theophrastos は Neleus に贈与した。彼は Skepsis へ持ち帰り、子孫に贈与したが、この人たちは学者ではなかったので、この書物を蔵い込んでしまい、注意を払わずに放置したのである。そして彼らは、Skepsis を支配する Attalos 家の王たちが Pergamon の図書館の整備のために、書物を熱心に採していることを聞いて、地下の穴の中へ隠し込んだのである。……………その結果、Theophrastos 以後の古い時期の Peripatos 派の人々にとっては、公開的なものを主とする少数の書物を除いては、全く書物がなかったので、実証的に哲学することができず、平凡な命題を空しく論ずるだけであった (Strab. XIII, 54)。

このようにして Aristoteles の創設した学園は、次の学頭 Theophrastos の時代までが黄金時代であって、第三代目の学頭 Straton の時代から急速に衰微することになる¹⁾。資料や参考文献を必要とする両大家の学風が、経済的基盤や生活方式の安定していない、この学園で持続していくのは、そもそも不可能に近いことであった。それゆえ、この派の学者や学風がむしろアレクサンドレイアへ移住してしまうのも、必然的なことであった。この推移の過程で重大な役割を果たしたのは、Theophrastos の弟子の Phaleron の Demetrios であった²⁾。彼はアテナイで10年間 (318—307 B.C.)、政治の最高指導者として活躍するが、Kassandros の死後、Antigonos を恐れてエジプトの Ptolemaios Soter のもとへ逃れる (Diog. V, 75; 78)。そして王立の図書館のために世界中の書物をすべて蒐集しようと努力し、50万巻にも及ぶ書物を実際に集めたという (Josephus, *Ant. Jud.* XII, 12, 14)。Theophrastos の後継者となる STRATON 自身も、Ptolemaios Philadelphos に教えて、80タラントンという大金を受取ったと伝えられている (Diog. V, 58)。この例からも知られるように、リュケイオンの学者たちはマケドニア系の権力者たちから、かなり高額な資金を受取ったようであるが、しかし異国出身者が多かったから、アテナイで確固たる学園を維持するのは困難であった。前述のように、Theophrastos の遺言状では、学園は10人の研究者の共有ということになっていた。Straton の遺言状には、その点について言及されていないが (Diog. V, 61—64)、次の学頭 LYKON (Troas 出身) の遺言状では、「私は Peripatos を友人たちのうち (使用したいと) 欲する人々に遺す」と述べて、やはり10人の名前を列挙している ((Diog. V, 70)。このような共有制が却って困難な問題を含んでいることは、前述のように、Aristoteles の指摘するところであった。

1) Cf. J. P. Lynch, *Aristotle's School, A Study of a Greek Educational Institution*, 1972, pp. 146—149. ただし、上記の Strabon の伝えに対しては、かなり批判的な解釈も出されている。例えば、Anton-Hermann Chroust, *The Miraculous Disappearance and Recovery of the Corpus Aristotelicum, Classica et Medievalia*, xxiii, 1962, pp. 50ff.

2) この間の事情については、栗野頼之祐「ファレロンのデメトリオスとアレクサンドリア学府の創建について」、『西洋古典学研究』Ⅱ, 1954 に詳論がある。

第九章 特異な生活の諸学派

Platon や Aristoteles も、国外の僭主や王たちの援助を受けていたが、これを潔癖に拒否したのは有名な DIOGENES (ca 400—ca 325 B.C.) である。彼の父 Hikesios は、Sinope の銀行家 (τραπεζίτης) であったが、その polis の貨幣製造の仕事を委託されていたときに、混ぜ物を入れて悪貨を作り、それが発覚して追放されたという。しかし別の伝えによれば、この事件を起こしたのは父ではなく、Diogenes 自身であったという (Diog. VI, 20)。この事件は、Diogenes の思想や人間性と関係があったのかも知れない。慣習によるもの (τὰ κατὰ νόμον) よりも自然によるもの (τὰ κατὰ φύσιν) を重視するのが彼の哲学上の立場であったから (Diog. VI, 71)、その立場に従って人為的なものに過ぎない貨幣 (νόμισμα) を意図的に混乱させたのだとも考えられるからである。それだけに、この貨幣に関する逸話は創作されたのだとも考えられるが、しかし強いて疑う必要もないようである。とにかく Diogenes は明らかに富裕な家に生れたのであるが、自身または父の起こした不名誉な事件のために追放されたか、または自発的に亡命するかして、アテナイへ来て、Sokrates 門下の Antisthenes の教えを受けることになった。そして、「亡命者であったから、質素な生活へと進んだ」わけである (Diog. VI, 21)。この亡命のとき、奴隷の一人 Manes が彼に従って来たのであるが、その研究生活 (διατριβή) に耐えられず、逃亡してしまった。それを探し出せと人々が言うと、Diogenes は「Manes が Diogenes を必要としないのに、Diogenes が Manes を必要とするのは恥ずべきことではないか」と答えたという (Ael. Var. Hist. XIII, 28)。最初は彼も人並の旅行者の如く奴隷を従えていたわけであるが、このようにして一人だけの生活者になったのである。そして亡命者だという点を非難する者に対しては、「私は亡命したおかげで哲学することになったのだ」と答えることにしていた (Diog. VI, 49)。家業や市民としての義務から解放されることによって、初めて自由に哲学することができるようになったというわけである。Sokrates や Platon において見られた国家との結びつきが、ここに完全に断ち切られることになる。どこの出身かと問う者に対しては、世界市民 (κοσμοπολίτης) だと答えたという (Diog. VI, 63)。

その生活振りは質素を通り越して不潔でさえあった。外套を二つに畳んで、その中に寝たり、食物を入れた袋をぶらさげて歩き、場所を選ばずに食べて眠り、そして対話した (Diog. VI, 22)。その生活はとりわけ国家の公共施設に寄生したものであった。Zeus 神殿の柱廊 (στοά) や行列館 (τὸ Πομπεῖον) を指さして、「アテナイ人は自分のために住処を整備してくれる」と、彼は常に語っていた (Diog. VI, 22)。このように公共施設に寄生しつつ、それ以上に必要な金銭や物品については、人々から乞い求めて得ていたようである。しかし、その態度は傲然としていた。「彼は金銭に欠乏していたが、友人 (τοὺς φίλους) に対して、《恵んで欲しい》とは言わず、《返してくれ》と要求するのであった」と伝えられる (Diog. VI, 46. cf. VI, 50; 67)。さらには Platon その他の哲学者や大衆を痛烈に嘲弄する言葉を吐いていた。「しかし彼はアテナイ人から愛されてい

た。或る若者が彼の甕 (*πίθος*) を割ったとき、彼らはこの若者を打ち懲らし、*Diogenes* には別の甕を贈った」という (*Diog. VI, 43*)。このように一般市民の好意を受けていたとすれば、彼の乞食生活も案外に容易であったはずである。このような一般市民の僅かな好意に頼るという生活を、彼は最善と考えたらしい。*Krateros* が自分の所へ来るように招いたとき、*Diogenes* は「*Krateros* のもとで贅沢な食事を味わうよりは、アテナイで塩を舐めている方を望む」と語ったという (*Diog. VI, 57*)。このような点では *Diogenes* にも、なおポリス市民的な意識が残存していたわけである。権力者の援助に頼ることについては、これを潔癖に拒否したばかりでなく、例えば *Platon* が *Dionysios* の援助を受けたことをも厳しく批判した (*Diog. VI, 58*)。彼がマケドニアの有力者 *Antipatros* から受取ったのは、外套一枚に過ぎなかった (*Diog. VI, 66*)。

もちろん彼にも弟子がいた。アテナイ以外からも相当に多くの弟子が来ていたようである。*Aigina* の *Onesikritos* なる人物が、次男の *Androstheneis* をアテナイへ行かせたところが、*Diogenes* の弟子になってしまって、帰国しなかった。そこで長男の *Philiskos* をやって探させたところが、これも同様のことになって、やはり帰って来ない。そこで父親自身がアテナイへ来たが、彼も *Diogenes* に引きつけられてしまったという (*Diog. VI, 75 f.*)。その他にも多くの弟子がおり、政治家として活躍した人物も多かったということである (*Diog. VI, 76*)。従って、これらの弟子たちが *Diogenes* の生活を支えていたとも考えられるが、しかし他人に頼らぬ自足的生活ということが、彼の哲学の眼目であったから、たとえ富裕な弟子がいたとしても、援助することをむしろ慎んだであろう。*Diogenes* はもちろん誰をも食事に招待しなかったし、また誰かから招待されることもなかったという (*Ael. Var. Hist. XIII, 26*)。学者が生活費を得る方法としては、権力者に頼るか、友人や弟子に支えられるか、この二つの方法のほかに、ソフィストとして授業料を取って教えるという方法もあったはずである。しかし *Diogenes* の場合、その可能性を暗示する逸話さえ伝えられていない。

このようにして彼は野良犬のような生活を送っていたのであるが、その生活は青年期や壮年期には耐えられるにしても、年齢が進むとともに悲惨なものとなるであろう。しかし幸か不幸か、彼も野良犬の生活に終止符を打たざるを得なくなる。*Aigina* へ航海する途中、彼は海賊に捕えられ、*Krete* 島へ運ばれて、そこで売りに出された。そのとき特技は何かと問われて、「人間どもを支配すること」と答え、そこに居合せた *Korinthos* の *Xeniades* を指さして、「この男は主人を必要としているから、この男に私を売るがよい」と言った。そこで *Xeniades* は彼を買い取って、*Korinthos* へ連れ帰り、自分の子供たちの教育および家産の管理を委ねたところ、非常に立派に任務を果たすと伝えられる (*Diog. VI, 74*)。家庭教師および執事の仕事をしていたわけであるが、これは彼にとっては快適な地位であったらしい。友人たちが身代金を出して、買い戻してやろうとしたが、彼はその申出を拒否した (*Diog. VI, 75*)。そして *Xeniades* 家で老いて死んだと伝えられるが (*Diog. VI, 31*)、晩年の彼は *Korinthos* 城外の *Kraneion* という体育場で時を過ごすことが多かったらしい (*Diog. VI, 77*)。Alexandros 大王が *Diogenes* の日光浴を邪魔したという有名な逸話は、この体育場を舞台としている (*Diog. VI, 38*)。

Diogenes の弟子としては、両替商 (τραπεζίτης) の下僕 (οἰκέτης) の地位から狂気を装って解放されて哲学へ転じた Monimos とか (Diog. VI, 82), 前述の Onesikritos とかもいるが (Diog. VI, 84), その生涯がかなり詳しく伝えられているのは、Thebai 出身の KRATES (ca 365—285 B.C.) である。彼は名家の生れであったが、あるとき悲劇で Telephos の悲惨な姿を見て、犬儒派の哲学へと進み、自分の財産 (τὴν οὐσίαν) を金に代えて、200タラントンを集め、それを同胞市民に分配してしまったと伝えられる (Diog. VI, 87)。また別の伝えによれば、Diogenes が Krates を説得して、その財産を放棄して放牧地にさせ、さらに金銭があるならば、海中へ捨てよと説いたのだという (Diog. VI, 87)。ところが、Krates の家は Alexandros 大王の宿舎になったこともある資産家であったから、親戚の者が来ては、その決心を阻止しようとした。しかし彼はそれらの人々を杖で追い払って、決意を変えなかったという。さらに別の伝えによれば、彼は銀行家に或る金額を預け、もしも自分の子供たちが普通の人間 (ἰδιῶται) になったならば、彼らに返して貰うこととし、もしも哲学者になったならば、市民たちに分配して欲しいと取り決めた。というのも、もしも子供たちが哲学するならば、彼らは何物をも必要としないからであったという (Diog. VI, 88)。なお Krates は弟子 Metrokles の妹 Hipparchia に恋慕されて、これと結婚するが、もちろん普通の家庭とは異なっていた。妻も夫と同様の粗末な着物をまとい、宴会などにも一緒に出席した (Diog. VI, 96~98)。

このように犬儒派の人々は自由奔放に振舞い、可能な限り財産などは持つまいと努めたから、確固たる学園を組織することは、彼らにとって不可能なことであり、また彼らの欲することでもなかった。もっとも、この派の影響のもとに哲学を形成した Zenon は、比較的堅実な処世態度を示し、アテナイに学園を開くことになる。しかし、このストア派に移る前に、Zenon よりも5歳ほど年長の Epikuros について述べる必要がある。

EPIKUROΣ (341—271 B.C.) はアテナイ市民であるが、父が Samos 島への軍事植民に参加したため、そこで育ち、18歳のときにアテナイへ戻った。当時、アカデメイアでは Xenokrates が活躍しており、Aristoteles は Chalkis へ退いていた。Alexandros 大王が死ぬと、Samos のアテナイ人植民者は Perdikkas によって追い出されたため、父は Kolophon へ移住した。そのため Epikuros もそこへ移って、その地で弟子を集めたが、307/6年に再びアテナイへ戻り、自分の学園を開いたという (Diog. X, 1 f.)。ただし Apollodoros によれば、彼が最初に弟子を集めたのは Mytilene および Lampsakos であったという (Diog. X, 15)。彼の父は読み書きの教師 (γραμματιστής) であったと伝えられ、また彼自身も最初は同じような教師として出発したらしい (Diog. X, 2 f.)。この職業はギリシアでは決して尊敬されるものではなかったし、父が植民に出ていることから見ても、Epikuros の育った条件の貧しさが想像される。しかし外地での生活によって多少の資金を蓄えたらしく、二度目にアテナイへ戻って学園を開いたときには、そのための庭園を80ムナで買い取って、そこに弟子たちと一緒に住んだのである (Diog. X, 10)。Platon, Aristoteles および Zenon の開いた学園が、いずれも国家の公共施設に半ば依存していたのに対

して、Epikuros の学園は完全な意味での私立学校であった。そして各地から多数の弟子が集まり、そこで共同生活を営んだが、「その生活は極めて質素で単純なもの」(εὐτελέστατα καὶ λιτότατα διαιτώμενοι) であって、「一杯の安葡萄酒で満足し、それ以外は彼らの飲物は水だけであった」という (Diog. X, 11)。そして Epikuros 自身、書簡において、水と粗末なパンだけで満足していると述べ、さらに「贅沢をしたくなかったときのために、小さい壺に入れたチーズを送って下さい」と述べている。「人生の目的は快樂であると唱えた人物が、このような生活をしていた」のである (Diog. X, 11)。

しかし彼はピュタゴラス派の如き財産共有には反対した。彼の考えでは、共有制は却って仲間同志の不信を意味するからであった (Diog. X, 11)。この点では、Aristoteles の考えに近かったわけである。前述のように、彼の学園は完全な意味で私立学校であったから、それだけに学園存続のための経済的基礎について彼は周到に配慮していた。Platon や Aristoteles の遺言状には、それぞれが創始した学園の維持の方法については何も述べられていない。Theophrastos の遺言状では、その点について多少の言及はあるが、あまり注意がゆきとどいていない。それに対して Epikuros の遺言状では、学園の維持や、そのための経済的な問題が、正面から扱われている。遺言状の冒頭の部分を引用すると。

私は以下のように、自分の全財産を Bate 区の Philokrates の子の Amynomachos および Potamos 区の Demetrios の子の Timokrates に、Metroon の中に記録されている兩人への贈与条項に従って与える。ただし兩人は、学園 (τὸν κήπον) および付属施設を、Mytilene 出身で Agemortos の子の Hermarchos および彼とともに哲学する人々、さらに Hermarchos が哲学の後継者として残す人々のために提供し、そこで哲学研究に従事させること。さらに私は、私の学派の哲学者たちに永久に次の仕事を委ねる。即ち、Amynomachos および Timokrates と協力して学園における研究活動を可能な限りの方法で維持すること。また兩人の相続人たちも、私の学派の後継者となる人たちと同じように、最も確実な方法で学園を維持してくれるように。また Hermarchos が生きている限りは、Amynomachos および Timokrates は Melite 区にある家屋を、Hermarchos および彼とともに哲学する人々に提供して、そこに住まわせること (Diog. X, 16 f.)。

この文面から明らかなように、Epikuros は学園の不動産を全部 Amynomachos と Timokrates というアテナイ人に相続させ、哲学上の後継者としては Mytilene 出身の Hermarchos を任命したのである。そして遠い将来まで見越して、設備の面での責任者と学問の面での責任者とを一応は区別し、しかも両者の協力によって学園を維持させようとした。異国の出身者は学問や人格の面で傑出していても、アテナイの法の規制によって学園の不動産を相続できなかったから、このような体制を立てざるを得なかったわけである。Platon 死後におけるアカデメイアの分裂とか、Theophrastos 死後における蔵書の流出とか、これら先輩の失敗を繰返さないように、Epikuros は配慮したのかも知れない。学園の主要な動産である蔵書については、Epikuros は全部を学問上の指導者 Hermarchos に贈ると遺言している (Diog. X, 21)。

さて遺言状では、上に引用した部分に続いて、まず学園で催される儀式や会合について述べられている。Epikuros の父母兄弟の法事の供物とか彼自身の誕生日の祝典とかであるが、その費用は、Amynomachos と Timokrates に与えた財産からの収入から支出されることになっている (Diog. X, 18)。Epikuros には妻子はなかったようであるが、親類の者たちが身のまわりに一緒に住んでいたようであり、その一人一人についての配慮も述べられている。家庭と学園との区別は殆んど不明であり、両者は一体化しているようである。Epikuros は自分の弟たちや奴隷の Mys をも、哲学の道へと進ませていたのである (Diog. X, 3)。そして誰であれ、自分に従って哲学の道を歩んで老いた者が生活に困らないように、出来るだけの配慮をしてくれるように遺言している (Diog. X, 20)。

かくて Epikuros の学園は、文字どおりの生活共同体であって、弟子たちはそこへ自分の身を委ねることができたのである。第二代の学頭に選ばれた HERMARCHOS 自身も、その父は Mytilene の貧しい市民であった (Diog. X, 24)。この学園は、研究員の生活様式や経済的基礎が最も安定していたようである。学園の組織者としては Epikuros が最も成功した。彼が遺言で示している将来への配慮は見事に効果を挙げる。この学園では、創立者の教説が保持され、次々に学頭が継承して、その他の学校がすべて消滅しても、少なくとも Diogenes Laertios の頃まで、中断なしに連続と存続したのである (Diog. X, 9)。

ストア派の開祖となったのは周知のように、ZENON (335—263 B.C.) である。彼の出身地は Kypros 島の Kition であるが、これはギリシア人の都市ではあるけれども、フェニキア人の植民者をも受入れていたという (Diog. VII, 1)。それゆえ彼はフェニキア系の人であった可能性がある。彼がアテナイへ来て哲学者になった事情については、いろいろな伝説がある。一説によれば、30歳の頃、フェニキアから Peiraieus へ紫貝を積んで航海していたが、海難に遇ってしまう。そしてアテナイへゆき、ふと書店へ入って、Xenophon の *Memorabilia* 第二巻を読んでいるうちに Sokrates に魅せられ、このような人物はどこにいるのかと尋ねた。そこへ運良く Krates が通りかかったので、書店の主人は、「あの人に従ってゆくが良いと教えた。それ以来 Krates の弟子となり、「私は海難に遇って、かえって良い航海をした」と語ったという (Diog. VII, 2~4)。しかし別の伝えによれば、アテナイに滞在していたときに、自分の船の海難事故のことを聞き、「親切にも運命 (*ἡ τύχη*) が私を哲学へと追いやって下さる」と語ったということであり、また別の伝えによれば、彼はアテナイで船荷を処分して、哲学へ転じたのだという (Diog. VII, 5)。この最後の伝えによれば、海難事故に遇ったわけではなく、完全に自発的に哲学へ向ったことになる。さらに別の伝えによれば、彼の父 Mnaseas は貿易商 (*ἐμπόρος*) として度々アテナイへ来て、Sokrates 関係の多くの書物を少年 Zenon のために買って帰っていた。Zenon は母国にいた頃から既に相当に哲学に親しんでいたのであり、アテナイへ来るや直ちに Krates の弟子になったのだという (Diog. VII, 31 f.)。

このように Zenon の前歴についての伝説は多様であったが、しかし彼の父や彼自身が貿易商であったことだけは確実であろう。それが何らかの転機を経て、哲学へ向うことになったのである。

それゆえ彼は非常な金持ちであった可能性があるが、事実、アテナイへ来たとき、1000タラントン以上の金を持っていたので、それを海上貿易業に貸出していたという伝えがある (Diog. VII, 13)。マケドニア王となった Antigonos Gonatas は、自らも哲学者であって、学者や文人を保護した人物であるが、Zenon にも沢山の贈物を送った。しかし Zenon は、それによって傲慢にもならず、また賤しくも見えなかったという (Diog. VII, 15)。その生活振りは非常に質素であって、ギリシア的な標準に達していなかったと言われる (Diog. VII, 16)。しかし或る学者から或る事柄について教えを受けて、料金100ドラクメを請求されたときには、その倍額を支払ったという (Diog. VII, 25)。

周知のように、彼はストア (*ἡ ποικίλη στοά*) で学校を開いたのであるが、そこは公共の施設であったから、彼としては設備のための費用を出す必要はなかった。誰でも利用できる場所であったから、彼は歩きながら講義し、教場のまわりに物見高い人間が立たないように防いでいたという (Diog. VII, 5)。また時には周囲で立見する人々に対して銅銭 (*χαλκόν*) を要求し、これによって人々が恐れて近づかなくなるように試みもしたし、また明らかに、「諸君が立ち去ってくれば、それだけ吾々には邪魔が少なくなるのだが」と話しかけることもあったという (Diog. VII, 14)。授業する場所の近くには乞食がたむろしていたりする (Diog. VII, 22)。このように Zenon は苦勞して公共設備の一部を占居して学校を開いていたのである。しかし、これは決して違法行為とは見なされなかった。むしろ異国人でありながら、アテナイにおいて自発的に教育活動をおこなっている者として、市民から賞讃され尊敬されていたようである。「アテナイ人は Zenon を非常に尊敬していた。その証拠に、城壁の鍵を彼のところに蔵っておいたし、また黄金の冠と青銅の肖像によって彼を顕彰したのである」という (Diog. VII, 6)。そしてアテナイ民会が Zenon を顕彰した決議文なるものが伝えられている。その前文は省略して決議の本文の冒頭を引用しよう。

Kition 出身で Mnaseas の子の Zenon は、この都市で長年にわたり哲学に没頭し、他の面でも立派な人物であり続け、自分のもとへ集まる青年を徳 (*ἀρετή*) や思慮 (*σωφροσύνη*) へと招き寄せ、最善へと努力させた。そして自己の生活を自らの教説と一致させ、万人の前へ模範として提示した。それゆえ民会は次のように決議した。……(Diog. VII, 10 f.)

このようにアテナイ市民は Zenon の人格や教育活動を高く評価していたのであるから、その Zenon がもしも経済的に困窮したりすれば、何らかの援助を公的に実行することもあり得たであろう。この決議文からも明らかなように、当時のアテナイでは哲学や学問への関心が一般化していたらしい。Isokrates や Platon などの学校で高等教育を受けた人々が、政治の世界でも有力になっていた。

Zenon の弟子として最も重要なのは、Assos 出身の KLEANTHES (331—232 B.C.) であり、その学校の後継者ともなった。もともと彼は拳闘士 (*πύκτης*) であったと伝えられ、非常に貧乏であった。アテナイへ着いたときには僅か4ドラクメしか持っていなかった。そして Zenon の弟子

になったが、貧乏で紙を買うことができず、講義を聞いては、陶片や牛骨に筆記した (Diog. VII, 174)。このようにして昼は学校で学びながら、夜は庭園での水汲みの仕事や麦砕きで賃銀を稼いでいた。あるとき Areopagos 会議が、これほど頑健な男がどのようにして生活の資を得ているのかと、彼を審問したので、彼は庭師と粉屋の女とを証人として召喚してもらい、無事に放免された。そればかりかアレオパゴス会議は彼に10ムナの賞金を贈ることを決議したが、しかし Zenon は彼にそれを受取ることを禁じたという (Diog. VII, 168 f.)。ただし彼の場合でも、権力者などから多少の援助を受けることはあったらしい。Antigonos 王が彼の講義を開き、3000ドラクメを贈ったことがあるという。しかし「哲学のためには水撒きでも何でもする」というのが、彼の態度であった。その師 Zenon の考えでは、生活費を稼ぐという目的とは別に、労働のための労働に従事すべきであったのである。Zenon は Kleanthes に対して、賃銀取りに出された奴隷の如く、賃銀の中から自分に1オボロスだけ返すように命じていた。それゆえ、「Kleanthes は、もし欲するならば、もう一人の Kleanthes を養うこともできる」と言われたのである (Diog. VII, 169 f.)。

この Kleanthes の弟子として第三代目の学頭になったのは、Soloi または Tarsos 出身の CHRYSIPPOS (ca 280—207 B.C.) であり、この学派の思想は彼によって大成された。もともと彼は長距離競走の選手として練習を積んでいたと伝えられるから (Diog. VII, 179), Kleanthes と同様、ストア派向きの素質をもっていたのであろう。哲学へ転じた動機としては、相続した財産が王領として没収されたために、哲学へ向ったのだと伝えられている (Diog. VII, 181)。それゆえ彼においても貧困と哲学とが直接に結びついていたわけである。その著述の題名の表は途中までしか保存されていないが、それでも160点という歴大な数の著作名を含んでいる。それらの著作のうち『生活費の獲得について』(Περὶ βίου καὶ πορισμοῦ) というのがあり、その第二巻において、智者(ὁ σοφός)が如何にして生活費を獲得すべきかを配慮するのだとして、次のように述べている。

そもそも彼は何のために生活費を獲得すべきなのか。もしも生きるためだとしても、生(τὸ βίον)は取るに足らぬものに過ぎない。もしも快樂のためだとすれば、その快樂もまた取るに足りぬものである。もしも徳(ἀρετή)のためだとすれば、徳はそれ自体で幸福のために自足的である。

さらに生活費の獲得の方法も嘲笑に値する。例えば、王から支給される方式では、王に対して服従しなければならないからである。また友情からのものでは、友情が金銭で買えるものとなってしまい、また智慧によって得る方式では、智慧が賃金かせぎをすることになるからである (Diog. VII, 188 f.)。

かくて Chrysippos によれば、智者が生活費を稼ぐことには、全く意味がないことになり、また稼ぐための適切な方法もないことになる。徳はそれ自体で幸福を作り出すのであるから、智者が徳を追求する限り、金銭の必要はないのである。従って智者の生活は必然的に貧困ということになる。

ここに引用した断片の後半部では、知識人が生活費を得る方法の実例が三つ挙げられている。王から支給される方式、友情によって贈られる方式、そして智慧によって稼ぐ方式。これまで見て来たように、この三つの方法は、確かにギリシアの知識人の生活費稼ぎの典型的な方法であった。第一の方法は、Diogenes が拒否した方法であるが、すでに Platon や Aristoteles が半ば用いていたものである。第二の方法は、Sokrates や Platon において見出された方法であり、ギリシア的な友情の慣習に根ざしていた。第三の方法は、いわゆるソフィストの方法であり、これも極めてギリシア的な特徴を帯びている。ところが Chrysisippos は、これらの方法のうち、どの方法も嘲笑すべきものだと考えた。そして実際、彼は多数の書物を著したにもかかわらず、どの著作においても王に語りかけてはいないという (Diog. VII, 185)。即ち、彼は著書を王に献呈して援助を得ようとはしなかったのである。(王侯貴族に著書を献呈して援助を受けるのは、近代に至るまでヨーロッパの知識人の生活費稼ぎの一つの方法であったけれども。)

ストア派の哲学者には、特異な職業から哲学に転じた者が多かったが、これと同時代の懐疑派の哲学者にも、明らかに同様の傾向が認められる。ただし懐疑派の人々には、貧困との闘いを見せびらかすような態度は見られなかったようである。

この派の代表として有名な PYRRHON (ca 360—ca 270 B.C.) は、Elis の人で、最初は貧しい無名の画家 (ζωγράφος) であった。しかし、その後 Alexandros の遠征に随行していた Abdera の Anaxarchos の弟子となり、彼とともに旅行して、インドの裸体の学者たち (γυμνοσοφισταί) やバビロニアの僧たち (οἱ Μάγοι) と交わり、それによって高潔な哲学者になったのだという。即ち、不可知論 (ἀκαταληψία) の立場に立って、判断停止 (ἐποχή) ということ唱えたのである (Diog. IX, 61)。そして実生活の面でも、この哲学上の立場を実行し、道を歩くにも危険物を避けようとせず、同行の弟子が避けるように世話したとも伝えられるが、しかし判断停止は哲学上だけのことであって、日常生活では先慮をもって行動したとも伝えられる。もちろん後者の伝えが正しいであろう。彼は90歳近くまで生きたのである (Diog. IX, 62)。

彼自身は世俗から遠ざかって孤独に生きようとしたが (Diog. IX, 63)、しかし祖国の人々は彼を尊敬し、神官長 (ἀρχιερεὺς) に任命し、また彼のことを考えて、あらゆる哲学者に免税 (ἀτέλεια) の特権を与えるように決議したという (Diog. IX, 64)。この頃には学者の貧乏は一般的な事実になっていたようである。Pyrrhon の生涯については、かなり多くの逸話が伝えられているが、しかし経済的な問題に関係したものは少ない。万事について無関心 (ἀδιαφορία) の態度を取ろうとするのが彼の主義であったから、財産とか富とかに対して、これを積極的に否定しようと思えなかったのかも知れない。Eratosthenes の『富と貧困について』によれば、彼は産婆 (μαία) を業とする姉か妹と一緒に敬虔に (εὐσεβῶς) 生活していて、時には自分で鶏や豚を市場へ売りに行ったりしたという (Diog. IX, 66)。そのような生活をしながら、思索に耽っていたのであろうか。著書は一冊も残さなかったが (Diog. IX, 102)、とにかく紀元後2世紀中頃には、Elis の町の広場 (ἀγορά) に Pyrrhon の肖像が建てられており、町の近くに彼の墓も残っていた (Paus. VI,

24, 5)。

この Pyrrhon の弟子として有名な TIMON (ca 320—ca 230 B.C.) は、Phleius (ペロポネソス東部の小さな polis) の人である。若年にして両親を失い、職業的な舞者になったが、やがて、この仕事に嫌気がさし、Megara に赴いて Stilpon (Megara 派の第三代目の学頭) の弟子となる。やがて帰国して結婚し、今度は妻を伴って Elis へゆき、Pyrrhon の弟子になったのだという (Diog. IX, 109)。しかし息子が生れたこともあって、彼は生活費に困り (ἀπορῶν μὲν τροφῶν), Hellespontos や Propontis 方面へ渡って、Chalkedon でソフィストとして稼ぎ、名声を挙げて財産を蓄えた。その上でアテナイへ移って、そこで歿したという (Diog. IX, 110)。その師 Pyrrhon と同じく、行年は90歳に近かったと伝えられる (Diog. IX, 112)。

彼は非常に庭園好き (φιλόκηπος) で、自己自身のことには没頭していた (ἰδιοπράγμων) と伝えられるが (Diog. IX, 112)、しかし Pyrrhon の如き一徹の人ではなかったらしく、融通のきく多才な作家として活躍している。哲学者であったが、叙事詩、悲劇、satyros 劇、喜劇、諷刺詩 (σίλλοι) などを作っているのである (Diog. IX, 111)。そして Athenaios によれば、むしろ諷刺詩の作者として有名であったらしい。

Phleius 出身の諷刺作家 (ὁ σίλλογράφος) の Timon は、Museion のことを鳥籠と言っているが、これはその中に養われている哲学者たちを嘲笑しているのである。というのも、彼は鶏舎の中の大切な鳥どものように、食物を与えられているからである (Athen. I, 22 d)。このように Athenaios は述べて、次のような Timon の諷刺詩を引用している。

多くの種族の住むエジプトで、多数の保護された
本の虫ども (βιβλιακοί) が、Musai の鳥籠の中で
果しなく論争しつつ養われている。

この詩はアレクサンドレイアの王立研究所の学者たちの生き方に対する意地悪い嘲笑であるが、さらに Timon は、その文献学者たちの業績そのものに対しても反感を抱いていた。Aratos が Timon に対して、如何にして Homeros の信頼できる詩篇を入手することができるかと尋ねたところ、Timon は「すでに校訂されてしまったものではなく、古い写本に出遭うならば」と答えたと言えられる (Diog. IX, 113)。

結 語

以上、ギリシアの知識人、主として哲学者について、その経済生活の実態を具体的に描き出すように努めて来た。その資料の大部分は逸話や伝説の類であって、文字どおりには信じられない性格のものである。しかも、その逸話や伝説にしても、決して全部を網羅し得たわけではない。しかし、それにしても以上の叙述から多少の結論を引出すことは許されるであろう。

そもそも哲学者の経済生活について、これほど豊富な逸話が伝えられていること自体が、注目すべき現象である。その原因の一つは、古代ギリシアにあっては、哲学は他の知的活動と異なって、当事者の生き方の問題であったからである。簡単に言えば、哲学者は一般人とは異なった風変わりな生き方をする人間であった。そのために一般人の間で、いろいろな逸話が語り伝えられることになったわけである。従ってギリシア哲学の実際の意味を知るためには、哲学と生活との密接な関係を念頭におく必要がある。

それでは、この哲学と生活との密着ということの原因はどこにあるのか。ギリシア人は自ら家の経済を運営しつつ、市民として政治の場で活躍する義務があった。彼らにとっては学問研究は、その余暇にのみ没頭すべきものであった。「学問的な討論」や「学校」が「余暇」(σχολή)という語で表現された事実は、このような学問の在り方を端的に示している。市民としての政治活動と家の経済の運営とを両立させることだけでも、ギリシアでは困難な問題であった¹⁾。しかも、その上さらに学問に没頭するとなると、いずれ破綻は必至であった。学問を重視して政治から離れるのは、比較的容易であったろう。しかし家の経済の問題には何らかの形で対決せざるを得ない。かくして学問研究と経済生活との密着した関係が成立していたわけである。

七賢人など最古の知識人にあっては、政治活動や経済活動をおこないながら、知識の面で傑出することができたらしい。そこには言わば三位一体があった。彼らの知識が一種の世間智に過ぎなかったからでもある。Thales 以下の最初の哲学者たちは、概して相当な資産家であったらしいので、Herakleitos などは政治から遠ざかるだけで、思索に耽ることができた。しかし、やがて Anaxagoras の如く、研究に没頭して、政治ばかりでなく、家産の管理からも離れようとする人物が出現する。このようにして研究活動と家の経済との背反が明確になる。この段階において職業的な知識人としてソフィストが出現するが、他方においては、Sokrates のように、耐乏生活に甘んじつつ、多少は友人や弟子の援助に頼る方向へ進んだ者もあった。このようにして知識人の経済生活の方式が、明確に二つの方向に分かれることになった。その一方はソフィスト的とでも言うべきものであって、知的な面での取引関係によって生計を立てるもの、他方はソクラテスのな方式であって、友愛関係によって生計を立てるものである。前者の場合に要求する授業料は極めて高額の場合も多かったから、この二つの方式は全く両極端であった。

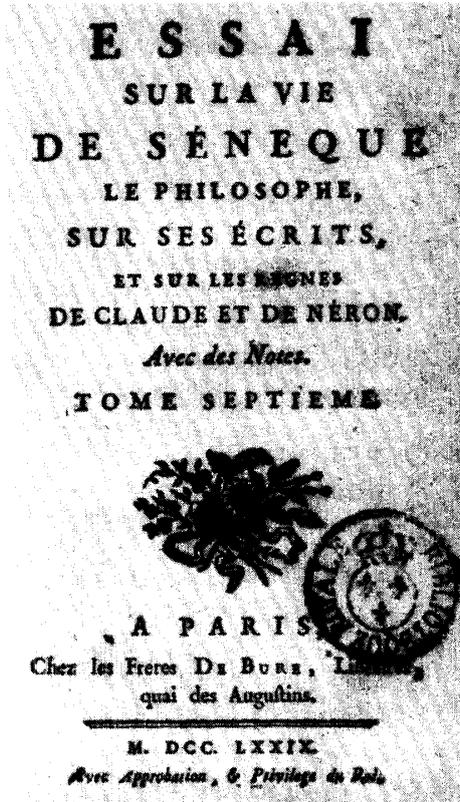
この二つの方式のうち、いずれを選ぶかは、もちろん第一に本人の信条など主体的条件によって決まることであろうが、さらに社会的条件によっても左右される。ポリスは共同体的性格が強かったから、同胞市民の間では授業料を要求しない傾向があった。その代りに、ここでは友愛(φιλία)による援助の関係が成立し易かった。第一の方式と第二の方式とは全く異質のもののように見えるけれども、実際には根は一つのものである。いずれもポリスの共同体的な性格の顕現に外ならない。この共同体的性格は、内部においては血縁的な親愛を生み出しつつ、外部に対して排他的な態度を取らせていたのである。

1) 藤縄謙三『ギリシア文化と日本文化』(角川書店, 1974年), 第四章(特に164頁以下)参照。

紀元前4世紀へ入ると学園が形成されるが、Isokratesの学校はソフィスト的な方式を特定の場所に定着させたものであって、ギリシア全体に門が開かれていた。EphorosをDiphorosと呼んだという逸話などは、そこにあった取引関係を端的に物語っている。その反対にPlatonの学園は友愛関係に基いていた。アテナイという共同体の中に、異邦人をも含めた小共同体を形成したのであるから、制度史的に見ても画期的なことではなかったはずである。この小共同体の中ではソクラテス的な方式が制度化されたわけであり、異邦人との間にも取引関係はなかった。

知識人の生きる道の第三の方式は、異国の権力者に庇護されるというものである。ギリシアでは古くから詩人たちが、僭主や国王の保護を受けることがあった(Paus. I, 2~3)。例えば、Samosの僭主PolykratesのもとにAnakreonが、SyrakusaiのHieronのもとにAischylosとSimonidesが、マケドニアのArchelaos王のもとにEuripidesが滞在した。そしてSokratesの弟子の世代になると、哲学者も詩人のように宮廷に出入りするようになる。Platonも僭主Dionysios父子と関係をもち、私生活の面で金銭的な援助を受けた可能性がある。次にAristotelesになると、彼自身が裕福であったためでもあろうが、マケドニア王家からの援助は私生活の補いではなく、高額な資金を要する研究への物質的助成であったらしい。ここからアレクサンドレイアのMuseionの如き王立研究所への道は非常に近いはずである。かくして施設を与えられ、生活を保証されて、実証主義的な学問が本格的に成立することになる。

しかし、その一方では、上記の三つの方式の全部を、少なくとも理論的には、否定する立場もあった。犬儒派やストア派の中に。もしも、この主張を完全に実行すれば、もちろん乞食か餓死より外に道はないことになる。従って、これら極端な人々も実際には妥協しながら生きていたのであろうが、しかし犬儒派のDiogenesもまたギリシアの哲学者の一つの典型であって、彼ら哲学者の生存基盤に潜む困難な状況を身をもって示しているようである。概して言えば、紀元前3世紀や2世紀になれば、学者の貧乏は一般的な事実になっていたようである。序文にDiodorosから引用した言葉は、ギリシアの学者の、そのような困難な状況を前提として発せられたものであったわけである。



『カネカ論』初版扉ページ

ESSAI
 SUR LES REGNES
 DE CLAUDE
 ET
 DE NÉRON,
 ET
 SUR LES MŒURS ET LES ÉCRITS
 DE SÉNEQUE,
 POUR SERVIR D'INTRODUCTION A
 LA LECTURE DE CE PHILOSOPHE.
 TOME PREMIER.



A LONDRES.

M. DCC. LXXXII.

ESSAI
 SUR LES REGNES
 DE CLAUDE
 ET
 DE NÉRON,
 ET
 SUR LES MŒURS ET LES ÉCRITS
 DE SÉNEQUE,
 POUR SERVIR D'INTRODUCTION A
 LA LECTURE DE CE PHILOSOPHE.
 TOME SECOND.



A LONDRES.

M. DCC. LXXXII.

『カネカ論』第2版扉ページ

autre fin de ce monde, un jugement sur
 des tra. L'œuvre de l'homme qui a écrit
 il ne nous en parvient que quelques frag-
 ments. De même, bien prodigieux, et
 nous en respirer pas qu'à deux mille ans
 dans le même ordre qu'il les avait entendus
 dans
 1. sur ce que l'on appelle, apparemment,
 le caractère romain d'André, de donner
 des leçons d'art oratoire, son œuvre qui
 jusqu'à alors n'avait été connue par des
 écrivains, ne contient pas, d'après
 " comme il est facile d'entendre ce
 " qu'il est facile d'apprendre (2)

2. Sur que la platonisme des républicains
 en général, les deux; les que lorsque
 le père fut d'une grande Cantique,
 un jour, il entra dans l'école de ^{philosophes} ~~philosophes~~
 en éloquence Cécile, du moment où il
 des potes à répéter la méthode. C'est
 après avoir été par lui-même en regard
 de son caractère. Son usage, dit-il
 d'une platonisme, de son fait; Par
 y comme Babylé; d'après, d'ailleurs, et
 comme eux un fait, à jour lorsque, tu
 est un grand fait, en cela de voir en (seul)
 ses yeux l'écrivain qui a tenu le propos
 Les clois d'attentive autour de laquelle
 ce la suppression de ne pas comment leur
 maître ^{maître} ~~maître~~ Senèque y consiste, à la
 condition que l'on ne s'occupe point
 que nous que l'on ne s'occupe plus de nous
 que l'on, avec qu'on n'a pas obtenu
 dans

(1) Sur ce que l'on appelle, apparemment,
 le caractère romain d'André, de donner
 des leçons d'art oratoire, son œuvre qui
 jusqu'à alors n'avait été connue par des
 écrivains, ne contient pas, d'après
 " comme il est facile d'entendre ce
 " qu'il est facile d'apprendre (2)

(2) Sur que la platonisme des républicains
 en général, les deux; les que lorsque
 le père fut d'une grande Cantique,
 un jour, il entra dans l'école de ^{philosophes} ~~philosophes~~
 en éloquence Cécile, du moment où il
 des potes à répéter la méthode. C'est
 après avoir été par lui-même en regard
 de son caractère. Son usage, dit-il
 d'une platonisme, de son fait; Par
 y comme Babylé; d'après, d'ailleurs, et
 comme eux un fait, à jour lorsque, tu
 est un grand fait, en cela de voir en (seul)
 ses yeux l'écrivain qui a tenu le propos
 Les clois d'attentive autour de laquelle
 ce la suppression de ne pas comment leur
 maître ^{maître} ~~maître~~ Senèque y consiste, à la
 condition que l'on ne s'occupe point
 que nous que l'on ne s'occupe plus de nous
 que l'on, avec qu'on n'a pas obtenu
 dans

l'homme permis d'en croire un peu
 qui parle à son fils. Le éloge n'est
 quelquefois que son conseil à d'occasions
 dignes. Le père de Senèque écrit à son fils
 (29) "vous avez la plus grande attention
 pour les fonctions civiles, et pour la
 bonté du mariage. Sans lesquelles on
 n'y parvient pas. votre passion de
 n'en avoir aucun, pour vous l'avez
 sans retour à l'étude de l'éloquence, de
 cet art qui facilite l'accès à toutes
 les sciences, et qui est une communication qu'il
 ne s'approprie pas. n'importe pas que
 j'use de lettres, à défaut de vous attendez
 à un travail que vous quitter. Soit fait
 du rang de votre père, mais o. l'abus du
 fort la meilleure partie de vous même vous
 n'avez plus d'élévation dans l'esprit que
 vos frères. à une valeur supérieure, pour
 les bons conseils, vous ne vous
 avez bien aimé. 3. vos parents ont accompagné
 pas l'excès même de votre genre.
 vos frères de tout l'ont à des lieux d'habitation
 - treize. en se destinant au barreau
 - ils ont procuré les fonctions de
 - sans redoubter "in qui" aux avantages
 - qui en s'en promettre. et sur un terrain
 - Je me sensis un autre malheur, vous
 - la même carrière s'en étoit l'apologie
 - l'en comentoit les dangers, et cependant
 - l'abandon vos frères à la suite, mais

(10) ^{note}
 (29) voir la page du haut
 des manuscrits de Senèque le père; pag. 143.
 146. tom. 3. Ed. var.

Apologie de Socrate

traduite de mémoire au Château de Vincennes

Athéniens, je me suis vu faire
 sur vous le discours de ma condamnation; pour moi j'ai
 tellement été frappé de la confiance avec laquelle ils ont
 parlé, qu'il m'est venu à l'esprit de vous dire, que je me
 suis presque oublié moi-même. Dans le grand nombre
 de personnes qu'il y a eu devant moi, une chose m'est venue
 entièrement à l'esprit, c'est qu'il y a eu de l'ignorance de vous
 envers moi comme un homme capable de
 vous séduire, et de me traduire pour étouffer
 ce que vous n'avez pas aperçu qu'il y avait à leur reproche de
 vous, vous vous apercevriez bientôt du con-
 traire; je ne les concepis pas à moins qu'ils n'eussent
 pas un homme étouffé, un homme réprimé. Dans
 ce cas je suis le témoin, mais non comme ils le sont;
 car, je vous le répète, il n'y a rien qui doive et vous
 mériter rien de moi qui ne le doive. ils ont eu des
 choses à dire sur moi et sur mes paroles. je ne les

ディドロ訳『ソクラテスの弁明』第1写稿 M p.1

[Reproduction autorisée par la Bibliothèque Nationale de Paris]

Copie

Des notes écrites par M^r. Diderot
en marge d'un volume des œuvres
de Milton pendant sa détention
au château de Vincennes.

Entré à Vincennes, le 29 Juillet
1789. 29 Jours au Donjon, huit
pour le cours, quit le parc.
Sorti.

Et bien que je ne sois, quelle
impression auront fait sur tout les discours
de mes accusateurs; pour moi j'ai tellement
été frappé de la confiance avec laquelle ils
ont parlé, quoi qu'ils n'eussent rien à dire
de vrai que je me suis près qu'oublié moi-
même. C'est le grand nombre de fautes et